
アボリシオネスト

妙竹林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アポリシオネスト

【Nコード】

N8430R

【作者名】

妙竹林

【あらすじ】

差別、偏見、そんなものが服を着て、私達と同じ空気を吸って、歩いているようなこの世界。

ほんの少し髪の色が珍しいだけで、ほんの少し瞳の色が鮮やかなだけで、ほんの少しお金を持っていないだけで「奴隷」として扱われる、そんな時代に私は生まれ、「魔法」という力にものを言わせ、力なき者達を無理矢理に、無茶苦茶に従わせる最低な人種が集まったこの町で、狂った人間の為に、私達は生かされている。

そこで救世主とおおおじょおおお!!!

メイドとか魔法合戦とかお決まり、お約束が多々参ります!!

第一話 奴隸狩り（前書き）

久々の投稿だぜい！ ひゃっほい！！

第一話 奴隷狩り

差別、偏見、そんなものが服を着て、私達と同じ空気を吸って、歩いているようなこの世界。

ほんの少し髪の色が珍しいだけで、ほんの少し瞳の色が鮮やかなだけで、ほんの少しお金を持っていないだけで「奴隷」として扱われる、そんな時代に私は生まれ、「魔法」という力にものを言わせ、力なき者達を無理矢理に、無茶苦茶に従わせる最低な人種が集まったこの町で、狂った人間の為に、私達は生かされている。

毎日私の隣の人を買われていく。私がそれを眺めていると光を失った眼を此方に向けて、出し尽くしたはずの涙を流して、助けを求めてくる。でもどうしようもない。力を持たない私では何も出来ない。今日は六人買われて行った。恐らく今日はこれで店じまい。店が閉まると一日一回のご飯が出る。今日、与えられたのは芋二つ。

あら、今日はいつもより少ないのね。そんなことを考えながら私は、手に取った芋を全部均等に半分ずつ分けて皆に配る。この店に居るのは後四人。その全てが女の子。まあ一週間もしたら何十人と増えるんでしょうけど。

芋を口につけようとしたその時、この中で一番小さい子がお腹を鳴らした。多分急に胃に食べ物が入ったからかしら。手に持っていた芋は既に無くなっていた。私は自分の持っていた芋をその娘に渡した。その娘……名前は……えっと……ああ、覚えてないや……。いや、覚えてないって言うより知らない。名前なんか知らされないから。とりあえず、その娘は目を見開いて、私の差し出した芋と私の顔を交互に見つめている。私が微笑むと、その娘は満面の笑みを浮かべ、私から芋を受け取り、頬張った。

この生活ももう既に六年目。一日くらい食べなくなっても全然平気。だっていつ死ぬか分かんないし。八歳の頃到此処に入れられてからずっとこの繰り返し。栄養失調で何人もの人が死んで行くのを見て

いるけど。私は全然食べなくても、全く死ぬ心配がない。そりゃあ痩せ細って骨なんかいつでも砕けそうだけど、私は元気そのものだった。我ながら図太い。出来れば早く死にたい。今の今までずっと此処で暮らしている。それはもう地獄。でも買われたらそれはもっと地獄。っていうか六年も此処にいて買われなくてどうということ？ 胸？ 胸が無いのがいけないの？ あー、取り乱してしまった。買われた人達はずっと酷く、辛い事に会っているというのに…………。不謹慎だ…………。もう寝よう。

そう思っただけで私は冷たい石の床に身を預けた。少しウトウトし始めた頃、もう閉店して、店主が扉を閉めようとしているのに、客がやって来た。その人は黒くてボサボサで、それでいて風に靡くとさらさらと流れている髪の毛に、今みたいな夜でも良く分かる、漆黒の眼をしていた男だった。年は私の二つくらい上かな？

その人は店の前で何やら店主と喋っている。私は耳を澄ませて聴いてみた。盗み聞きなんて趣味じゃないけど、他にやる事もないし、すると聴こえてきた声は低くも無く、高くも無い、それでいてどこか透き通っているような、そんな声だった。此処のハゲ店主のような年代ものの濁声なんかとは比べ物にならないくらい、耳にすっと入ってきた。

「見るだけだからいーじゃんよー」

「ダメダメ、今日はもう店じまいだ。帰んな小僧」

「頼むって！ な！ なっ！ この通り！」

「だーかーらー…………」

男の人はどうやら奴隷を見に来たらしい。店主は、今店に女の子が四人しか居ないから見に来る事を拒んでいる。この見栄っ張りが。

男の人は手を合わせ、頭の上に持って行き、少しお辞儀をしながら頼んでいる。

「じゃあ、ほんの少しだけだぞ？」

「さんきゅっ！ 恩にきるぜ！」

状況的に店主が折れたらしい。男の人は笑顔で私たちの居る牢屋に向かってきた。そして私の顔を覗き込んできた。見詰め合っていると、なんだか凄く恥ずかしい。だってこの人物凄く整った顔立ちをしてるんだよ？ 少し切れ長な眼に、薄い唇。視線を逸らそうかと思っただけ、なんだかそれは負けのような気がして、逸らすに逸らせない。私顔赤くなってるのかな…………。

数秒見詰め合っただろうか、男の人は口を数ミリ単位で開き、小声で私に向かつて喋りかけてきた。

「綺麗な銀髪だな」

「えっ！？」

その人の口から出た言葉は私にとって予想外のものだった。此処に入ってから六年間、罵倒されることはあっても、褒められた事は無かった。しかもこの髪の毛を。

「えっ？ あ…………え…………はい？」

「まあ、俺はセミロングよりロングのほうが好きだけだな。なあちよっとお喋りしよーぜ？」

「は…………？ え…………あの…………」

「なあマスター！　ちよつと喋ってもいいよな！」

「ああゝ好きにしろい」

そういつと店主は大きな欠伸をしながら店の奥へと戻っていった。男の人は微笑むと、私の後ろに居た、三人の女の子を手で招いた。奴隷と話がしたいなんていう客は始めて見た。男の人が何を考えているか全く分からない。でも何故かとても心強かった。不思議な感覚に頭を悩ませていると、男の人は優しい声で私達に話しかけてきた。

「助かりたい？」

「えっ いや……あの………」

その人は私達にそんな事を聞いてきた。そんなのもちろん助かりたいに決まっている。でもそれをこの人に言つて、店主にばらされでもしたら……。そうやって四人で顔を見合わせ、黙りこくつていると、男の人が

「あゝ言いつらいなあ。そりゃそうだな。まあでもお前らの反応を見ていると分かった。助かりたいだろ？」

私は咄嗟に頷いてしまった。しまったという表情を浮かべていると男の人は続けて、

「あはは、素直なのは良い事だぜ？　よしじゃあ助けてやる！」

「はあ？」

私はこの人の言っている意味が全く理解できなかった。何処の世界に奴隷を助ける客が居るんだよ、と思った。他の三人を見ても呆れた様な表情を浮かべている。

「はあ？ とは何だ。助けてやるって言ってるんだよ」

「あなた、誰ですか……？」

客だという事は承知していたが聞かずに入られなかった。だってこんなにおバカっぷりを見せられたらねえ？ 一体この人は何を考えているんだ、と思っっていたら、

「俺？ 俺はね……今日からお前達のご主人様！」

ああそういう意味ですか。つまり私達を買うつていう事ですか？ なーんだ結局こんなにカッコいい人も奴隷を買うんだ。ちよつときめいた私が馬鹿みたい。いや、元々期待なんかしてなかったけど？ 男の人は立ち上がって、檻に手を伸ばした。

「な、なにをしているんだ貴様っ!？」

店主が怒鳴り声を上げた。男の人が何かしたのかな？ 何て思っで見上げるとさっきまでとは違い、男の人の顔が何故だかよく見える。変だなと思って店主の方を向くと、これもはっきりと見える。一体何が起こったんだと思ったら、隣で女の子が眼を見開いている。

「ど、如何したの？」

と聞くと、

「お、お、檻から……………」

檻から？ 檻が如何したって言うのよ？ そう思つて立ち上がると、足腰が弱っているからか、後ろによろけてしまった。後ろの壁に背中をぶつけると、なんだかゴツゴツしている。手で壁を押し返そうとしたら、手がすり抜けた。驚いて前に飛び退くと、男の人の体に触れた。私は一体どれ程混乱していたのか、男の人に思いつきり抱きついてしまった。

「ぐえっ……………！ し、絞まつてる！ 死ぬ！ 死ぬって！」

「あつ！ す、すみません……………」

私は顔が紅くなるのを感じながら男の人から手を離した。

「ああ……………おえっ…光る川が見えたぜ……………」

男の人は自分の腰辺りを擦りながら、私をジト目で見てきた。

「まあいいや。さ、行こうか？ お前たち！」

「何をほざいてるっ！ 泥棒かつ！？」

店主は顔を蒼白にしながら叫んでいる。男の人は全く慌てる素振りも見せず、私達の背中を押して、店から出ようとしている。

「おっさん、奴隷狩りって知ってる？」

「知らん訳が無いだろう！ というかそれとこれとは関係ない……………」

…ま、まさか!？」

鈍いなあ、と男の人が呟きながら私達は背中を押され続けている。
奴隷狩り……。今、巷で噂になっている男女二人組みの悪党。
よく分からないけど、凄い魔法を使って奴隷を助けるとか言う名目で、奴隷売買店を潰しまくっているらしい、潰された店の数は八十を越えるとか何とか、とこの間来た客が店主と話していた。今は男の人しか居ないけど、もしかして、いやもしかしなくても、この人は奴隷狩り……？

私は感極まった。奴隷売買店や世間の中では犯罪者とされているが私達にとっては、いわば救世主。ただの噂だったので、絵空事と思いついていなかったが、まさか本当に居るなんて。他の子ども達を見ても全員、頬が緩みきっている。

「くっ……………!! 噂かと思って防犯魔法を強化していなかったのが間違いだったか! そんな事より貴様っ!! どうやってそいつ等を檻から出した!？」

「はあ? んなことどーだっていいじゃん? それよりさあマスタ―?」

男の人が言い終わると同時に、窓が割れ灰色の長い髪を靡かせた女の人が店主の顔面に、左足の蹴りが入った。

「ぐはあっ!!!？」

「横気をつけな……………って、ああ遅かったか……………」

「さっさと来て下さい、ユウト。外は寒いですよ?」

「あつはっはっは……はっは……はは……はあ………」

「えっ？ 何ですかその溜息？ 私何にも悪くないですよね！？」

「ああ……悪くないよ？ ただ気絶させないで欲しかったなあ……俺が脅したかったのに……ってあれ？ 何してますのん？」

男の人が汗を流しながら女の人の方へ振り向いた。すると女の人
は倒れている店主の胸倉を掴んで、目にも留まらない速さで、往復
ビンタを繰り返していた。

しかし見れば見るほど美人な人なあ。この人も恐らく奴隷狩り
の一人なんだろうけど……。

「何って、起こしてるんですよ？ 脅したいんでしょう？ 全く……
……」

「いやいや、逆に永遠の眠りへと誘う気ですか、あなた？ ってい
うか何でそんなにあてつけがましいの？ ねえ？」

「しつこいですよ？ 男の癖に」

「うわお……すっげえうぜえ………」

私達を尻目に二人がそんな夫婦漫才を続けていると、店主が目
を覚ました。起きた店主の顔は普段の倍以上膨らんでいた。

「あ、やっと起きましたか？ ではあちらにてユウトのお説教を受
けて下さい」

「ぐはっ……はあはあ」

店主は女の人に、ユウトと呼ばれた男の人の前まで蹴り飛ばされた。男の人は倒れている店主の前で屈んで、腫れ上がった店主の頬を鷲掴みにして、持ち上げた。

「がつ……………いつてえ……………」

「おいマスター、次、こんな事してんの見つけたら……………そんなときはお前が奴隷になっちゃうぜ?」

「ひつ……………」

完全に怯え、満身創痍な店主に男の人がそう言った後、男の人は店主を壁に投げつけた。店主は小物の置いてあった棚に背中を強く打ちつけ、再び気絶した。

「一体何が起こった!?!」

騒ぎを聞きつけた近所の住民達のが駆けつけてきた。

「な、何だこれは!?!」

「あれを見る! 店主が倒れているぞ!」

「お、おい……………あつちはまさか奴隷狩りじゃないか!?!」

「ほ、本当だつ! 全員奴等を捕まえる!」

住民達は私達を見つけると、一目散に飛び掛って来た。私は怖くなり、男の人の後ろに隠れながら他の子たちと共に固まった。

「フィレーヌ、魔方陣出しといて」

「畏まりました」

男の人がそういうと、女の人の方が指が光った。そしてその指で何やら床に円を描いている。するとその円が翡翠色に輝きだし、変な模様が浮かび上がってきた。男の人はというと私達が女の人にその円の中に連れ込まれたのを確認し、突っ込んでくる住人の方に手を向け、何やら唱えている。

『謹んで速やかに失せなおバカ共 v a n i s h 』

へ、変な呪文……。私がそう思った瞬間、男の人の手から紅く光る光線が放たれた。その大きさは、住人達をゆうに飲み込む程だった。何処までもが紅く染まりそれが収まった時、住人達は向かいの建物を突き抜けていた。

「さてと……んじゃあ帰るかあ」

「はい、では……」

男の人がそういうと、女の方は手を天にかざした。すると円の輝きは一層増し、私達を包み込んだ。

~~~~~

光が収まり私が目を開けると、そこにはとてつもなく大きな館が建っていた。さっきまで居た町は何処にも無く、ただその館だけが私達の眼前を埋め尽くした。隣には男の人と女の人が居る。男の人

が館に近付いて行き、私達は女の人に背中を押された。私達が途惑っている女の人優しく微笑み、私達に囁いた。

「大丈夫です。私共は貴女方を助けただけですから」

「え……………」

「何してんだ？ さつさと来いよ？」

「女の子には色々あるのですよ」

「はあ？ なんだそりゃ？」

「さあ、行きましょう？」

「は、はい……………」

私達は館の玄関の前まで連れて行かれた。そして男の人は玄関を開けた。すると…………

『お帰りなさいませ、ご主人様！ フィレーヌ様！ そしてようこそ新しき仲間の方々！！』

そこには大量のメイド服を着た女の人や、数人の執事服を着た男の人、それに私服であろう服を着た人達が寸分の狂いもなく、レッドカーペットの隣に並んでいた。私達が呆然としてみると、男の人が私達の前に立ち微笑みながらこう言った。

「ようこそ俺の館へ！　そして……………今日から俺がお前達のご主人様だ！」

「……………それ毎回言ってますけど恥ずかしくないのですか？」

「うるせー！！！」

こうして私達、“元”奴隷は此处で過ごすこととなった。

## 第一話 奴隸狩り（後書き）

急に新しい作品が書きたくなりました。

## 第二話 初めて見るものばかり

「ふいふ、蘇る」

さて、そんなこんなで私は今、温泉で今までの汚れを落としている。最低な世界と最悪な時代によって錆付いた体を一瞬で清めてくれた。しかし温泉といっても何処かに外出した訳でもない。じゃあ此処はどこかって？ 館の中ですよ！！ 何という金持ちですかあのお方は！？

「なーに悶々してんのよ？」

私がこの館に圧巻していると、横から“元”奴隷仲間のリイシャが泳ぎながらこつちへ向かってきた。リイシャさん、胸が浮かんでますわよ？

「ああ、リイシャ……相変わらず大きいね……あなた牢屋に居た時何食べてたの？」

「何ってアンタと同じモンだけど？」

「はー、へー、ほー、さようでございますか……」

リイシャは私の入った二年後に奴隷としてあの店に入れられた。つまり奴隷生活は四年間。入った当初は私とどこいどこいだったのに……成長速度が速すぎるんじゃない？ まあ今となつてはそんな事はどうでもいい。リイシャは腰まである緑色の長いポニーテールを揺らしながら、私の周りをグルグル泳いでいる。温泉って泳いじゃダメなんじゃないの？

「ラナさん……」

一人の子が赤茶色の短い髪を振り、弱弱しく私の名前を呼びながら、お湯の中を歩いて私に近付いてきた。……確かこの子は私が芋をあげた子。

「君、なんで私の名前知ってるの？」

「だ、だってさっき自己紹介したじゃないですか……」

あ、そういえば温泉に入る前に自己紹介したなあ。私とリィシャともう一人、ルッカちゃんは自分の名前を知ってたから良かったけど……

「そういえば君、名前無かったね？」

こういうことも奴隷には良くある事だ。この子は確か四歳の頃に入れられたんだっけ？　そこから今日まで二年間、一緒に過ごしてきた。

「は、はい……だからさっきフィレーヌ様が名前を付けてくれるって……」

「えっそうなの？　良かったね！」

「は、はい……」

フィレーヌ様。この人は私達が助け出された時に居た女の人。あの後自己紹介が終わった時、温泉に案内されている間、横に行つて

ずつと見上げてた。フィレーヌ様は、とにかく美人！ それ以外表  
しようが無い。そのくらい美人な人だった。女の私でも惚れてしま  
いそうだった。灰色の長い、さらさらの髪の毛が一度、鼻の近くま  
で来た時失神しそうになった。物凄くいい匂い。奴隷生活の時には  
考えられないくらい甘く、全てを包み込んでくれそうなお匂いだった。  
あの人はまさに天使！！

「それで名前は貰ったの？」

「は、はい……今日から私はシフォウと名乗る事になりました……」

「シフオウ……シフオウちゃんね、いい名前だよ！」

「あ、ありがとうございます…………ユウトさんにも褒められました  
…………えへへ」

「なんですとおっ！！！！！！？？？？」

「うわっ！？」

シフォウちゃんがそう言った時、お湯の中から突如、巨大なメロ  
ンが……失礼、リイシャが水しぶきを盛大に上げて、飛び出して  
きた。ああ、シフォウちゃんが怯えてるじゃない。

「えーっと、シフォウちゃん!？」

「はい……!？」

「フィレーヌ様につけて貰ったんだって？ それは素晴らしい名前」

だよ？ でもそれはユウト様に褒められてもいい理由にはならん  
っ！……！」

「ひいっ！……！？」

「やめなよ、リイシャ。シフォウちゃんが怯えてるよ？」

そう、何を隠そうリイシャはユウトさんにぞっこんなのだ。それはもう大変なくらい。自己紹介中ずっとユウトさんを見つめていて、顔を真っ赤にしていた。

「くそう……あたしだって……あたしだってええええええ……！」

「あ、リイシャ………」

リイシャは叫びながら温泉から出て行ってしまった。確かにユウトさん……私たちを牢屋から解放してくれた、あの魔法使いの男の人はカッコいい。リイシャが惚れるのも分かる気がする。

「あら、リイシャさん行っちゃいましたね」

何とも間延びした声で金髪の女の子が近付いてきた。この子の名前はルツカ。私と同じ“元”奴隷仲間の子。

「あ、ルツカちゃん？」

「ラナさん、この子名前貰ったんですって？」

「うん、今日からシフォウちゃんだよね？」

「は、はい……」

「ふん、牢屋に居た時は名前知らなかったから、あんまり関わる  
ことが無かったけど、これからよろしくね。シフォウ」

「は、はい……あ、でも……ユウトさんは渡しません……」

「「えっ？」」

どうやらシフォウちゃんもユウトさんのことを好きになったみたい。  
……。……っていうか、結構積極的なんだね、シフォウちゃん……  
…。

〃〃〃

私達が温泉から上がると、フィレーヌ様が四人分の服を用意して  
待っていてくれた。全員、ワンピースだけど、それぞれ色が違う。ど  
うやら髪の色に合っているらしい。私は銀色、リイシャは黄緑、  
ルツカちゃんは黄色、そしてシフォウちゃんは赤色だった。それぞ  
れの分の下着まで用意されていた。

全員が着替え終わると、先ずフィレーヌ様に部屋に案内された。  
フィレーヌ様が廊下の一番端の部屋の前で止まると、ドアを開けた。  
するとその部屋は物凄く豪華で、ベッドが四つ置いてあり、テーブ  
ルの上には果物が乗せてあった。天井からは大きなシャンデリアが  
吊るされている。

私達が呆然としていると、フィレーヌ様が、

「此処は四人部屋となっております。この館に慣れるまでは此処で  
過ごしてください。その内、一人部屋へと案内いたしますので」

「えっ…………いや、そんな…………此処で十分です……………」

「そうですか？ では取り敢えず夕食の準備が出来るまで此処で御寛ぎ下さい。その際には此処に迎えに来させますので」

「は、はい……………」

「では」

そういつとフィレーヌ様は、ドアを閉めて何処かへ行ってしまった。見知らぬ所に置かれると、いくら知り合いが居ようとも心細くなってしまう。私達はずっとドアの前から動けなかった。どれだけ時間が経っただろうか、突然リイシャが動き出した。

「ちよっ…………リイシャ!？」

「いや、お腹空いちやってさぁ……………これ食べれんのかな？」

そう言ってリイシャが指差したものは、テーブルの上の果物だった。

「た、食べれると思うよ？」

「じゃ、じゃあ……………い、頂きまーす……………はむっ」

「…………くっ……………」

私達は真っ赤なリングを手にしたリイシャの近くまで行き、固唾を呑んでそれを見守った。

「ど、どう」

私がそう聞くと、リイシャは固まったまま動かなくなってしまった。

「リ、リイシャ……………」

「……………」

「ねえ、リイシャってば！」

「リイシャさん？」

「……………んまいっ！……！」

「うわっ！？」

私がリイシャの肩を掴んで揺らすとリイシャは急に、叫んで飛び跳ねた。

「な、何だこれは……………さっきまで奴隷生活をしていた時の芋とは比べ物にならないっ！！こんなものがこの世に存在してもいいのか！？」

「そ、そんなにおいしいの……………？ど、どれ私も一口……………ぱくっ」

「ど、どうだラナ？」

「な、何これ……………！？これは宝？」

私はこのリンゴのあまりのおいしさに度肝を抜かれた。この六年間食べていたものは一体何だったの？　　というかあれは食べ物？　　ああダメ、もう手が止まらない。

「ちよつ、ラナ！？　食べすぎ！　あたしにも寄りこしなさい！」

「私にもくださーい、ラナさん」

「わ、私も……………」

私達の手はもう止まらなかった。テーブルの上に置かれた果物は見る見るうちに消えていく。ああ、こんなものを今まで知らなかったなんて…………　悔やまれる。六年分の空腹が一気に満たされる。

私達はテーブルの上にあった果物を全て平らげた。もうこれ以上の至福はない。私は涙を流していた。普通の人からすればこれっぽちで、とか思うんだろうけど私、いや私達にとってどんな事よりも幸福な事なこと。

その幸福をかみ締め、私達が快楽に浸り、ソファにすわって居ると、部屋のドアがノックされた。

「うわっ！？　ど、如何しよう！？」

「な、何うるたえてるのリイシャ？　早く出てきてよ」

「いやいやいや、そんなん言うならラナが行って来てよ！　　っていつか声震えてるよ！？」

「な、なんで私が行かなきゃなんないの？　ほら早く！」

「お二人とも、何してるんですか？」

私とリイシャが揉めているとルツカちゃんが首を傾げてきた。

「いや、だってだって！」

「リイシャうるさい！」

「シフォウちゃんが行きましたよ？」

「「えっ？」」

ルツカちゃんが指差した方向を見ると、シフォウちゃんがドアに向かつててくてく歩いていった。シフォウちゃんがドアを開けるとそこには、ユウトさんが居た。

「おい、夕飯の準備が出来たから呼びに来たぞ……………ってなんで抱き合ってたの？」

「え！？ いやあの……………」

「あははは……………」

「まあいいや早く付いて来な」

そういつて私達は食堂へと案内された。

## 第二話 初めて見るものばかり（後書き）

今回は起承転結の承転結がありません。

そのくらい山場がありません。

って言うかココ見てくれてる人居るのかな？

良かったら感想よろしくお願いします。

### 第三話 ギャグだかシリアスだかあーもう何がなんだか

私達は今、とてつもなく大きな食堂に来ている。そこには何百人もの人がご飯を食べており、何人ものコックが忙しく、それで居て幸せそうに、笑顔を絶やさず働いている。奴隷生活で鈍りきった嗅覚を鋭く突き刺し、匂いだけで満腹になりそうな料理が大量に作られていく。ユウトさんは私達を適当な席に座らせると、自分はその向かい側に座り、テーブルの上に置いてあったメニュー表を取り出し私達の前に置いた。そこには見たことも無い、色とりどりの料理が描かれていた。見ているだけで私達は和まされた。

「さあ、どれか食べたいもんあるか？ 何でもいいぞ」

「な、何でも……………」

「あ、とは言ってもさっき果物を平らげてたなあ。やめとく？」

「い、いえ！ まだまだ食べられます！！」

「そう？ 無理はすんなよ？」

無理だなんてとんでもない。こちらら六年間芋ばっかだったのに、目の前に転がっている財宝をみすみす逃すわけが無い。それは他の三人も同じのようで、メニュー表から全員、目が離れなかった。

「相席、よろしいですか？」

「えっあっファイ、フィレーヌ様！？」

どれを食べようか迷っていると、突如横からフードがついた服を着ているフィレーヌ様が現れた。あれ？ ユウトさんもフードつきの服着てるよね？ ペアルック？ …… まあどうでもいいか。

「おおフィレーヌ、座れ座れ」

「失礼致します。皆様お部屋の方は如何でしたか？」

「あっはい…………… もう天国でした」

「あははは、天国かぁ。あいつらもさぞ喜ぶだろうな」

「そうですね」

「あいつら？」

私が訪ねるとユウトさんが席を立った。

「フィレーヌ、俺皆の分適当に取ってくるから説明しといて」

「畏まりました」

そういうとユウトさんは人の群れの中に飛び込んで行った。突如沸き起こる歓声、…………… というより奇声？ 訳が分からず、ただ眺めていると、フィレーヌ様が私達に優しく話しかけてきた。

「ユウトはこの館で大人気なのですよ」

「こ、この館の人たちって一体……………」

「この館に住んでいる人々は全員、貴女達と同じ“元”奴隷なのですよ」

「えっ！？ 奴隷！？」

フィレーヌ様のその発言に、さっきまで話も聞かずにメニュー表をずっと眺めていたリイシャまでもが反応した。

「……………という事はもしかして、この人達も奴隷狩りによって助けられた人達？」

「ラナさんは察しが早くて助かります。それにラナさんだけではなく、リイシャさんもルツカさんもシフォウさんも全員、“元”奴隷にしては饒舌でございますね。あつ、気を悪くしないで下さい。決して皮肉を込めた訳ではございません」

わたわたするフィレーヌ様が物凄く可愛い。こんなに清楚な人なのに中身が意外に合っていない。そのギャップがこれまたいい。

「それは私達が全員、貴族以上の階級から奴隷にされた物だからです」

「貴族以上？ 貴族以上なのに奴隷にですか？」

「はい……………ルツカちゃんとシフォウちゃんは貴族の末っ子として産まれたんですが、もうこれ以上子はいらないと、たったそれだけの理由で捨てられました。リイシャは私達が居た国の王族に代々仕えていた家系の長女だったのですが、魔法の才能が無いつてだけで捨てられました。私は……………王族の長女でした」

「王族？ 何故奴隷になられたのですか？」

「頭が悪かったから」

「えっ？」

「私、昔から頭が悪かったんですよ。それだけです」

「それだけで……………」

「王族の子にとっちゃそれ以上の理由なんて無いですよ」

気付くと私は涙を流していた。いや最初っから気付いてた。でも受け入れたくなかった。自分が泣いているという事を認めてしまえば、それは辛い過去、というよりさっきまでの現実を思い出してしまう何よりの糧になるから。しかし、私は今自分が泣いている事を認めてしまった。一度、枷が外れると後はもう如何しようも無い。声を必死に噛み殺して、涙だけで抑えようとした。横から、同じように泣いている声が聞こえる。皆、悲しいんだ。当然だ。何よりも信頼できるはずの家族に見捨てられ、地獄のような日々を送ったのだから。俯いて涙を流していると腕のアザが目に入った。温泉に入り、汚れは落とせた。だけど辛い過去の象徴であるアザを落とす事は出来なかった。きつとこれからもこれを見るたび思い出すんだろう。いつか笑い話になるなんて有り得ない。笑えない過去。たとえアザが消えたとしても。私は忘れる事なんか出来ない。それは皆同じ。

「……………お部屋に戻りましょうか」

私達はただ頷く事しか出来なかった。声を出したら必死に抑えて

いる声が、体を突き破って行きそうだったから。私達はフィレーヌ様の後を、嗚咽を漏らしながらついて行った。

部屋に着くと私とリィシャはソファ、ルツカちゃんとシフォウちゃんベッドの上で顔を伏せた。

「夕食は後でお持ちいたします」

そういうとフィレーヌ様はドアを閉め出て行ってしまった。すると私達を縛っていた鎖が引き千切れた様に、涙が溢れた。声を噎らしながら、それでも尚、泣き続けた。忘れてはならない過去ではない。忘れてもいい過去、いや忘れなければならない過去。

ユウトさんやフィレーヌ様はいつかこの過去を忘れさせてくれるのだろう。だから他の人達も、あれだけ幸せそうな顔で今を過ごせているのだろう。そう思うと、益々涙が止まらなくなった。今までの過去の清算、そしてこれからの未来への希望、その両方を兼ね備えた涙は、絶え間なく私達の頬を伝った。

~~~~~

「あり？ あいつらは？」

やっとの思いで歓声から逃れ、六人分のご飯をトレイに載せて運んできたユウトは、フィレーヌしか居ないテーブルを見てそういった。

「お部屋に戻られましたよ」

「えっ？ マジで？ この料理どーしょ？」

ユウトは料理の載ったトレイを見つめた。

「私が後で彼女達のお部屋に運んでおきます」

「ああ、そうしてくれ。んじゃあはいこれ」

「ムニエルですか。ありがとうございます。……それはそうと何故私の向かいに座られるのですか？」

「え？　だって横に座ったらおかしくね？」

「何もおかしい事などございません。むしろ横に来ないほうがおかしいです」

「あ、そう？　んじゃあ……………」

そういうとユウトは席を立ち、フィレーヌの横へと移動した。

「それでいいのです。では……………はい、あゝん」

「……………お約束ですね」

「はい、あゝん」

「いや、俺自分のあるし」

「はいっ、あゝん」

「わあゝったよ、食べりゃいいんだろ？　全くどつして……………
あ、これ美味しいな」

しびしび食べたユウトであつたがその料理の美味さに文句を言う事を忘れていた。

「まあそんな事は置いといて、ちゃんと説明したのか？」

「いえ、色々と諸事情が重なってしまい伝える事が出来ませんでした。申し訳ありません」

「ん、まあ料理を運んだ時にでも説明してやってくれ。何なら明日でもいいぜ？ あいつらも新人だから色々あるだろうし」

「そうですね。では私はこれで」

そういつて席を立ったフィレーヌの手には使い終わった食器だけがあつた。

「え？ 食つのはやつ！？ ちゃんと味わつた！？」

「私は料理が冷めないうちと思い、全力を尽くして味わい、よく噛んで食べました。せっかく料理長の新作を頼んだのに冷ましてしまったユウトとは違うのですよ」

「えっ？ うわっ！ 最悪だ！？ 料理長の新作“クローズドエッグ炒め”があつー！」

「何ですか、その料理名は………ただのオムレツでしょう？」

「甘いな、フィレーヌ。だから貴様はいつまで経ってもフィレーヌなんだよー！」

「はい、私は私ですが？」

フィレーヌがユウトに希少動物を見る目を向ける。眼が据わっている。

「そうじゃなーいっ！！ 名前というものは非常に大事なんだよ！ “オムレツ”と“クロースドエッグ炒め”じゃゴージャス感が違うだろっ！？ 2000？のビタミンCっていうよりもレモン100個分のビタミンCっていうほうがインパクトあるだろっ！？ んで2000？って結局は2gだからねっ！？ どーだ名前の大切さが分かったかっ！！？」

「あーはいはい。さようでございますね。では私はラナさん達の感想を伝える為、技術係の方へ行つて参ります」

「え？ スルーですか？ もうちょっと反応しよーよ？」

「それでは」

「うつわぁ……………最低だアイツ……………あ、これ冷めても美味いな」

~~~~~

フィレーヌ様が出て行つてから一時間ほど経った。今の時刻は2時。三時間前まで牢屋の中に居たのに、今は物凄く豪華な部屋のソファにリイシャと一緒に凭れ掛かっている。ルツカちゃんとシフオウちゃんは泣きつかれたのか二人共、同じベッドで寝てしまっている。リイシャの目は真っ赤だった。私は顔を洗う為、洗面所へと向かった。鏡で自分の顔を見た。……………目が真っ赤になって

いる事を除けば、自分で言うのもなんだがなかなか可愛い？ 私は決してナルシストではないはず……多分。六年間自分の顔なんか見たことも無かったからかもしれない。他の皆も可愛い子ばかり。……しかし、改めてみると、私の髪ってこんなに銀色だったんだ。思わず自分でも見惚れてしまうくらい。いや、だから私はナルシストじゃないって。あーもう、頭が混乱してきた。生きてきて今までに無いくらいの涙を流したから、疲れているんだろう。私ももう寝よう。そう思って洗面所から出ると、部屋のドアがノックされた。一瞬吃驚してしまったが、何事も二回目は楽だ。私はドアを開けた。するとそこには料理が置かれたトレイを運ぶフィレーヌ様が居た。

「夕飯をお持ちいたしましたが食べられますか……おや？ 目が真っ赤ではないですか」

「えっ？ あっ!？」

今更ながら恥ずかしさが込み上げて来た。こんな真っ赤な状態をフィレーヌ様に見せてしまうなんて。

「うふふ。今日薬を持っていますので差してあげましょう。さあ上を向いて」

私は言われるがままに上を向いた。右目に目薬が一滴落ちてきた。その後左目にも。少し沁みたが、何ともいえない心地好い感じが目を覆った。

フィレーヌ様は目薬をポケットに治すと料理を部屋の中に運んだ。料理からは湯気が立ち昇っている。きつと温め直してくれたのだろう。フィレーヌ様は料理をテーブルの上に並べた。きっちり四人分ある。嗅覚を擽る匂いが部屋全体に立ち込める。

「おや？ ルツカさんとシフォウさんは寝ていらつしゃるのですね。あら、リイシャさんも目が真つ赤ではございませんか。どうぞ上を向いて下さい。目薬を差してあげましょう」

「はっ！ えっ？ あ、ありがとうございます」

リイシャは急に我に返った。そして私同様今更ながらに恥ずかしさが込み上げて来たのだろう、顔を真つ赤にした。

「おおう、沁みる」

「うふふ、沁みているのは効いている証拠ですよ。ではお二人共料理をお持ちしましたので、どうぞお食べ下さい」

「あ、ありがとうございます」

「では、食器は明日の朝に取りに来ますので、その時にこの館にいつでも説明させて頂きます」

「分かりました」

「では、おやすみなさい」

「は、はい」

そういつてフィレーヌ様は部屋を出て行った。目の前には豪華な食事、食べない訳にはいかない。あ、ルツカちゃんとシフォウちゃんも起こしてあげなきゃ。そう思ったら二人は匂いに釣られたのか、自ら起き上がった。

その日、私達は今まで生きてきた中で始めて快感を得る満腹というものを味わった。

### 第三話 ギャグだかシリアスだかあーもう何がなんだか（後書き）

ああ……展開の遅さに自分も泣きそう。

いや、だってこれしょうがなくないつすか！？

とか何とか言い訳してみたり。

感想宜しく願います！！

#### 第四話 国を制圧できる程の女神の微笑み

昨日私達は、今までに食べた事のない豪勢なご馳走を鱈腹頂き、尚且つベッドで寝られるという、夢のような一夜を過ごした。それはもう牢屋の中とは比べ物にならないくらい寝心地が良くて、なんと只今13時！ 昨日寝たのが確か23時だったので……十四時間も寝たの！？ ああ、奴隷生活の時には考えられない……いつも5時に起きるように躑けられ、寝るのは夜中の1時。暇を見つけては数分寝るくらいで、たった四時間の睡眠しか取れなかった。そういう風に躑けられた。寝たくても体が勝手に5時に起きてしまう。そんな生活だったのに、この館で寝たこの日は体が睡眠をたっぷりととっていた。もしかしたらそういう魔法でも掛けられていたのかな？ 多分店主が倒されたから解けたんだろうけど。まあ、なんにせよ睡眠がたっぷり取れるのはいい事だね。

テーブルの上に置いてあった箸の食器はもう既に無かった。フィレーヌ様がとっていつてくれたんだろう。昨日差して貰った目薬のおかげもあるのかな？ 凄く寝起きがいい。隣に並んでいるベッドを見るとリイシャ達がすやすやと寝ている。

私は、顔を洗う為、洗面所へと向かった。鏡に映った私の顔は昨日とは違い生気に満ち溢れていた。そこで私はふと思った。

私はこんな事をしてもいいの？ いくら王族出身だからと言っても所詮は奴隷。本来ならこんな素晴らしい部屋で寝る事はおろか、食べ物を食べる事すら許されないのに……。一体どうして？ 何故昨日まで奴隷だった私達に、こんなに優しくしてくれるのだろうか。

そんな事を思っていると、部屋のドアがノックされた。他の皆はまだ寝ている。必然的に私が出なくてはならない。私はドアの前まで行き、取っ手に手を掛けた。あれ？ 昨日は全然緊張しなかったのに、今このドアを挟んであの綺麗なお方がいると思うと、なんだ

か恥ずかしくなってきた。再びドアがノックされる。鍵は掛かっていないのだから入ってくればいいのに。そんなことを考えながら、私は意を決してドアを開けた。するとそこには予想通り、いや予想以上の美女が立っていた。

「おはようございます、ラナさん。よく眠れたでしょうか？」

「お、おはようございます。物凄くよく眠れました」

「そうですね、それは良かったです」

そう言っただけの美女、フィレーヌ様は灰色の髪を揺らし微笑んだ。この微笑みだけで一國を制圧できそうだ。

「他の皆さんはまだ寝ていらっしゃる様ですね。昼食をお持ちいたしましたが、いかがなさいましょう？」

「あ……えっと、そこに置いておいて貰えば結構です」

「そうですね？ では皆さんが起きて、昼食を食べ終えたら、昨日の食堂へいらして下さい。覚えてますか？」

「は、はい、覚えてます。分かりました。すぐに行きます」

「うふふ、そんなに焦らずゆっくり召し上がって下さいね。では」

フィレーヌ様は再び微笑んだ後、ドアを閉め出て行ってしまった。うん、もう少し一緒に居たかったなあ。……って何考えてるんだ、私は！？ あんな綺麗な人に昼食を持って来させておいて厚かましい！ 早いとこ皆を起こして食べよう。あんな綺麗な方を待たせる

わけには行かない。

「皆、起きて〜」

私は昼食をテーブルの上に置いて、皆を起こしにかかった。一人ひとり肩を掴んで揺らしてみるのが、いつこうに起きる気配が無い。リイシャに至っては肩を揺らした途端、お腹を蹴って来た。如何しようか……。

お腹を押さえ蹲って考えていると、名案が思い浮かんだ。私は痛むお腹と、闘いながらテーブルまで移動した。

「ふふふ、この匂いに勝てるかな？」

そういつて私は昼食の上に乗っているドーム状の食器を外した。その瞬間、部屋全体に香ばしい匂いが漂った。そこには赤、緑、黄、など様々な料理が並んでいた。そこで私の目を引いたのが、芋だった。しかしそれは牢屋に居た時の芋とは違い、細切りにされ、かりっと揚げられていた。私は我慢が出来なくなり、一口つまんだ。すると口の中に今まで感じた事の無い美味しさが広がった。昨日の夕飯とはまた別の美味しさがある。

私はもう一口と思って手を伸ばした。しかしそこで、リイシャ達が起きてきた。

「な、何だ！ この嗅覚を食い千切る様な香ばしい匂いは！？」

「この世のものですか〜？」

「おはようございます……」

ちゃんと挨拶できてるのシフォウちゃんだけじゃない……。

「おはよう、皆。フィレーヌ様が持ってきてくれたよ」

正直、私は喋りたくなかった。喋る事でこの美味しさが逃げてしまふと思ったから。

「これ、食べ終えたらフィレーヌ様が食堂で待っているから、早くたべちゃおう？」

「はいよ」

こうして私達は夢のようなご飯を二日連続で食べさせてもらった。……本当にいいのだろうか？ 私達がこんな幸せな事をしてもらって……。

~~~~~

私達は今、昨日の食堂に来ている。料理を食べ終えた食器をトレイに載せて運んで来た。食堂には人がちらほらとしか居なかった。それも全員私服の人だった。人が少なかったお陰で私達はすぐにフィレーヌ様を見つけることが出来た。

「お、お待たせいたしました」

「いえいえ、全然待っていませんよ。皆さん、おはようございます」

「」「おはようございます」「」

三人の声が重なった。

「あ、ラナさん、トレイはそのテーブルに置いておいて下さい。後で係の者に運ばせますので」

「えっ、そんな、自分たちで運びます！」

「遠慮しないで下さい。貴方達には説明しなければならない事がたくさんあるのですから」

「……分かりました」

私は言われるままにトレイをフィレーヌ様が座っている席の後ろのテーブルに置いた。そして私達はフィレーヌ様の向かい側に座った。

「では、この館について説明しましょう」

フィレーヌ様がそういうと、後ろから声を掛けられた。

「おう、起きてたのか。おはよう」

私達が振り返るとそこにはユウトさんが居た。

「お、おはようございます！！」

いち早くリィシャが反応した。それについて私達も挨拶をする。

「まあおはようつつても、もう昼過ぎだけだな」

あはは、とユウトさんは笑った。相変わらずカッコいい人だ。するとフィレーヌ様が不機嫌そうな口調でユウトさんに言った。

「話の腰を折らないで頂けますか？ ユウト」

「え？ あ、もしかして今説明してた？」

「いえ、するところです」

「あ、そう。じゃあ俺も混ぜてよ。いいだろ？」

そう言つてユウトさんはフィレー又様の横に座つた。

「では、改めて……、この館にいらつしやる方々は全員“元”奴隷です。これは昨日も言いましたね」

私は昨日の事を思い出し恥ずかしくなつてきた。

「この館に入つてきた人は全員、ユウトが奴隷狩りによって助けた人達です。それは私も同じ」

私はフィレー又様のこの発言に驚き、目を丸くした。

「フィレー又様も奴隷だつたんですか！？」

「はい」

まさかこんなにも綺麗な人が奴隷だつたなんて……なんて理不尽。

「それでは続きを……」

それから二時間ほどこの館の人達とルールについて説明してもら

った。先ず、朝起きると食堂にて朝食。昼食と夕食も食堂で食べる。部屋にご飯を持ち帰ってもいい。朝食を食べ終わると各自の仕事に就く。この館には様々な係がある。先ず料理を担当する料理係、館の掃除や庭の手入れをする清掃係、館の安全を守る警備係、病気や怪我の時に活躍する医療係、館の修理や物を作ったりする技術係、その他にも様々な係が存在し、互いに協力し合って暮らしている。各係で、大体二十人から三十人くらいの人が働いている。殆どの係が交代制となっており、働いている時はメイド服か執事服を着て、仕事が無い日は私服でいいらしい。働いているとは言っても基本的に自分に与えられた仕事をこなしていれば後は全て自由時間。重要な仕事は各係の長とフィレーヌ様と、この館の主人であるユウトさんで担っているらしい。外出は基本自由。ちゃんとユウトさんかフィレーヌ様、もしくは係の長に外出する事を伝えればそれでいいとの事。此処まではルールというルールは無い。ユウトさん曰く、此処は皆の家だからルールで縛る必要なんかないらしい。

後、私達のような新人が入ってきた場合、将来社会に出て困らないように、少しのお勉強と魔法を覚えなければならぬらしい。それは教育係のお仕事。と、大まかな説明が終わり私達は今、フィレーヌ様に館の中を案内されている。ユウトさんは説明が始まって一時間程度で大きな欠伸をして、何処かへ行ってしまった。フィレーヌ様の説明は分かり易かったが、私が一番聞きたかったことは聞けていない。

「さて、これで館の中は案内し終えましたね。ここまでで何か質問はございませんか？」

「あ、あの、フィレーヌ様……？」

シフォウちゃんが手を挙げた。やっぱり積極的だね……。

「はい、何でしょうシフォウさん？」

「この館には女の人が多いですが……、何故ですか……？」

シフォウちゃんは多分自分が一番気になっているだろうことを尋ねていた。

「ああ、それはですね、もちろんユウトが女たらしだからと言う訳ではないですよ？ 男の人も助けるのですが大体、「いつか必ず恩返しをつ！」と言って社会に出てしまわれるんですよ。女の人は大体ここに残ってユウトにお使えるみたいです」

聴き終えたシフォウちゃんはホッとしていた。多分ユウトさんが女たらしじゃないってわかったからだろう。

「なるほど、じゃああたしもいいですか？」

それまで黙っていたリイシャが手を挙げた。

「はい、何でしょうリイシャさん？」

「ユウト様ってどれくらい人気があるんですかっ？」

うーん、実にリイシャらしい質問だなあ。牢屋に居た時だってリイシャは笑顔を絶やさなかった。凄く前向きな子。私はその前向きさに憧れる。……あくまでも前向きさだけに。

「そうですね、この館の人は皆ユウトのことが大好きです。そこに恋愛感情を抱く人も居れば、ただ恩人だからと言う人も居ます。けど、男女関係なく全員に共通する事は、この館の人はユウトの

ことを信頼しきっているということです。奴隷だった私達を救ってくれ、尚且つ今の今まで面倒を見てくれますから」

「はあ、ライバルは多しってことか」

リイシャは少し溜息をついた。するとルツカちゃんも手を挙げた。

「何でしょう、ルツカさん？」

「この館の収入等はどうなっているんですか？」

おおつと……、ここで何とも現実味のある話を致しますか、ルツカちゃん……。おとなしそうにして実は意外と空気読めないのかな？

「この館の収入ですか？ そうですね、主な収入は技術係による町での物品の売買や、ユウトが新しい魔法を開発したときに特許を取ったりして、そこから出るお金ですね。まあ特許をとっていない魔法もありますが。後は社会に出て行った方々からの援助金などですね」

魔法の特許を取ったりだとか、やっぱりユウトさんは凄いな。そんな事を考えながら私は本当に一番聴きたかったことを聴いた。

「あの、私もいいですか？」

「はい、どうぞラナさん」

「何で、ユウトさんは奴隷を助けてくれるんですか？」

「……………」

フィレーヌ様が固まった。あちゃー、やっぱり聴いちゃダメだったかな？

「そうですね……勝手に言ってもいいものかどうか……まあいいでしょう。ユウトも元々は奴隷だったんです」

「えっ!？」

私達は驚きを隠せなかった。

「ユウトはこの国では珍しい黒髪ですから……。ユウトは奴隷として数年過ごしていました。そしてある日、ある老人に買われました。しかもその店の奴隷を全員。買われた先ではこのように奴隷たちが笑って暮らしていたそうです」

「と言う事はその老人も奴隷狩り？」

「いえ、その老人はちゃんとお金を払って奴隷を買っていましたから。そしてユウトはその老人に感謝しました。ユウトだけではありません。その老人の元に居た奴隷全員、その老人を崇めていました。しかし、その生活が二年ほど続いたある日、ユウトが老人に頼まれ街までお使いに行き、帰って来たらそこにあつたはずの館が綺麗さっぱり無くなっていたそうです。そして他の奴隷もその老人も全員、一人残らず殺されていました。殺した相手は、国」

「国？」

「はい、奴隷を優しく扱う老人を快く思っていなかったその国の国王が老人と奴隷を皆殺しにするよう仕向けたのです。たったそれだけ

の事で……。つまりユウトが奴隷を助けるのは、簡単に言うと老人の敵討ちと老人の意思を継いでです」

「そんな事が……」

「本人はもう吹っ切れたようですがね」

そういつて見せたフィレーヌ様の目は少しばかり涙が溜まっていた。でも悲しい顔をしている私達を見て、ユウトを信じていれば何も怖くありませんよ。と、言って優しく微笑んでくれた。

この微笑みをユウトさんは守っているんだ。

第四話 国を制圧できる程の女神の微笑み（後書き）

もつとギャグがしてえよ

因みにいつの時も大阪人が面白いとは限りません!!

友達の奈良人の方が断然面白い時だっております!

僕はツッコミ専門ですがね。(言い訳? 違いますよ)(汗)(

では感想宜しくお願いします!!

……しつこいかな?

第五話 やっと始まったファンタジーの王道（前書き）

今日は八時半から九時半まで
世界中で電気を消そうと言う
運動をするらしいです！
皆さんも参加しましょう！

とは言っても時差があるんですけどね

第五話 やつと始まったファンタジーの王道

私は今、自由時間を得て、この館の大きな中庭に来て日向ぼっこをしながら魔法合戦をしている人たちを見ている。おお、凄い火柱……。あれ、確か上級魔法だったっけ？ あらら、水柱で消されちゃった。あ、体術に切り替わった。な、何と言う攻防……、本当に女性ですか、あの方たちは？ 男性も呆氣に取られているじゃありませんか。

全員私服みたいだから、今日は休みなんだ。

私達がこの館に来て、既に一週間がたった。この一週間、私達がやった事と言うと、社会のお勉強と基本的な魔法の訓練。勉強といっても、私達は全員、貴族以上の家系出身の奴隷だったので基礎は出来ていた。

ルツカちゃんとシフォウちゃんは凄く頭が良く、魔法も上手だった。私とリイシャはと言うと勉強はそこそこ、しかし魔法に関しては大分上達した。リイシャは魔法の才能が無いと言う事で捨てられた筈だったのだけれど、多分その家の教え方が悪かったのだろう、リイシャは四人の中で一番早く、中級魔法まで使えるようになった。と、こんな風に私達は今幸せに過ごしている。それもこれも全てこの館の主人であるユウトさんのお陰。お陰のはずなんだけど……そのユウトさんというと……。

「何してるんですか……？」

「え？」

ユウトさんは何故か、私の居る左隣で、芝生の上に座っているフイレーヌ様に膝枕をされていた。何てうらやましい……。

「おっ？ 羨ましいか？ そつだろそつだろ？ もつと羨め」

「何でそんな事してるんですか、ユウトさん……？」

「何でつて……、お前らとの親睦を深める為に決まってるだろ？」

「だからって何で膝枕されてるんですか！？」

「え？ お前もされたいの？ 替わってやろうか？」

「え？ いいんですか？ ……じゃ無くてっ！ 見てるこつちが恥ずかしいからやめて下さい！」

「えゝやだ」

三日前ぐらいからユウトさんはずっとこうだ。私の横に来ては、親睦を深める為だ、とどこ何とか言っては変な事をしてくる。二日前なんか一日中一緒に居られた。お陰でその日の夜、リイシャにこつ酷く怒られた。美形なら何でも許されると思わないで下さい。

フィレーヌ様はフィレーヌ様でうつとりした顔になって頭撫でてるし……。おお、凄く可愛い……。

「それで？ 何なんですか毎日毎日私の横に来て？」

「だから親睦を深める為だつて……」

「じゃあ先ずリイシャ達から親睦を深めてきてくださいよ！」

「え？ あいつらとはもう深めつくしたぜ？」

「え？」

私が怒鳴るとユウトさんはきよとした顔になった。それにしても、もう既にリイシャ達はクリアされていたのか……。

「お前等がフィレーヌから説明を受けた次の日だったかな？ あの日は一日中喋ったなあ」

「ですから私と一緒に居てくれなかったのですよね？」

フィレーヌ様がムスツとした顔になった。だから破壊力が凄まじいって……。それに説明を受けた次の日って……。どうりで皆朝からどこかに行ってたんだ。まあ私は他のメイドや執事の人達と喋ってたからいいけど。お陰で友達がたくさん出来た。また遊びに行こう。

「別に親睦を深めるのはいいですけど……。具体的には如何するんですか？」

「んーまあ喋ってるだけでいいんじゃない？ 何か特別な事をする必要もないだらうよ」

「つまり無計画って訳ですね……」

私が呆れたように肩を竦めると、ユウトさんは起き上がった。フィレーヌさんが起き上がったユウトさんに淋しそうに両手を挙げる姿が可愛すぎる。これだけで映画が一本作れる。

そしてユウトさんが私の方に近付いてきて、私の右に座った。私はフィレーヌ様とユウトさんに挟まれる形になった。

「うん。やっぱりいつ見ても綺麗な銀髪だ」

そう言ってユウトさんは私の髪を撫でた。私は咄嗟の事に体をびくつと震わせたが、優しいユウトさんの手つきに安心感を覚えた。肩まであるこの銀髪……これと頭の悪さが原因で、高値で売られたんだっただけ。

「本当、綺麗だ……」

ちょっとユウトさん？　いつまで触ってるつもりですか？

「ユウト、ラナさんが嫌がってますよ？　止めてあげて下さい」

「ちえゝ、んじゃあ何かしょーか」

「何かって？」

ユウトさんはそう言った後、うーんと唸って考え込んでしまった。フィレーヌ様がそれを微笑みながら見ている。

しばらく考えていると突然ユウトさんが、ポンツと手を叩いた。

「そうだ、俺も魔法合戦してこよう！」

「は？」

「おゝい、お前たちゝ、混ぜてくれゝ！」

ユウトさんはそう叫びながら魔法合戦をしていた人達の中に入って行った。そこでもまた歓声……違った、奇声？　が発せられた。

「逃げましたね……」

フィレーヌ様がそう呟いた。

」

ユウトさんが皆となにやら喋っている。そこにいたのは男性がユウトさんを合わせ四人と、女性が五人だった。それを眺めていると、横からフィレーヌ様が話しかけてきた。

「よく見ておいた方がいいですよ？ ユウトの強さは異常ですから」

「？ あの見た目意外ちよつと残念なユウトさんが？」

「はいそこ煩い！ よし！ ルールは全員参加のデスマッチ！
後、武器は無し！ じゃあ始めよう！」

ユウトさんがそう言うのと、全員一斉に……消えた。

「あれ？ 皆何処行つた？」

「そこに居るではありませんか」

そう言ったフィレーヌ様は私達の居る後ろを指差していた。するとそこには、ユウトさんと一人の女性以外全員倒れていた。

「い、いつの間に……？」

「ほっほう、腕を上げたなイノリ」

「はっ当たり前だろ？ こっちはアンタに負けっぱなしで悔しいん

だよ！」

両者睨み合ったまま動かない。女の人はキャスケットを被って見て見えないが、凄く好戦的な青い眼をしており、背中の真ん中辺りまで伸びた青い髪の鋭さがまた、彼女の性格を物語っていた。

確かこの人は警備係の人で、体術ならこの館で一番って聞いた。その名も『天禍^{てんが}のイノリ』。その名の通り、彼女の凶暴さが天からの災いだということで付けられた通り名。町でも通じるという噂だ……。怖い人……。

「おいおい、そんな怒るなよ。まっ怒った顔も可愛いけどな！」

「なっ！？ おまつ！ 何で今そんな事っ！？」

「おらあっ！ 隙あり！」

ユウトさんがイノリさんを褒めた。イノリさんは顔を真っ赤にしている。ツンデレと言う奴なのだろうか？ しかし急にユウトさんは後ろに回りこみ魔力を込めた右手でイノリさんを殴ろうとした！
なんと卑怯なっ！？

「うん、まあわかってたけどな」

「ぐほおっ！？」

あ、思いつきりお腹を蹴られた。卑怯な手で後ろに回りこみ隙を取ったユウトさんは、振り向いたイノリさんに右足で蹴りを入れた。のたうちまわるユウトさん。10メートルくらい飛んだらうか？

「て、てめええ……！ 何故ひつかからねえ！？」

「ふん！ そんな技毎回やられてたら十回目くらいには気が付くんだよ！」

いや、遅いですよっ！ 十回つて、どんだけ引つかかってんですか！？ つていうか技ではないでしょうあれは！

「イノリさんも成長されましたね」

「ファイレー又様っ！？」

横を見るとファイレー又様が感無量といった様に、涙を流して喜んでた。ファイレー又様の時々の天然ぶりは破壊力抜群だ。

「ふふふ、なら俺も真剣にしてやろう……ぐはあっ！？」

「おせえよ。ちゃっちやと闘わんかい」

ユウトさんがお腹を抑えながら、不敵な笑みを見せたと思ったその時、イノリさんがなんと一歩でユウトさんとの間合いを締め、右ストレートをブチかました。

ユウトさんはまたまた吹っ飛び、中庭に植えてあった木にダイブした。上から数個リンゴが落ちてきて、ユウトさんの頭に当たった。

「こんのやろお……なんて卑怯な！」

「アンタ、人のこと言えねえよ？」

イノリさんはあれで魔力を拳に込めていないのだから驚きだ。警

備係の人によると、イノリさんは魔力を操るのが館で一番苦手らしく、そのため戦闘時は常に素で闘っているらしい。何という人でしょう……まさに災い。

「さうと、ユウトにラスト一発ぶち込んで、初勝利を収めるとすつかあ！」

そう言いながらイノリさんは倒れているユウトさんの元へと右腕を回しながら近付いていった。

「あたしさあ、アンタに勝ちたいがために嫌いな魔法、勉強して訓練してきたんだよねえ……。そのお陰で戦闘中は無理だけど、止まっている間、拳にだけなら魔力を集中できる様にまでなったんだよ。アンタが動けなくなるこの時を待ってたんだぜ？」

「ふっ……そりやあご苦労なこった……」

ゆつくりとユウトさんに近付いていくイノリさんの右腕には、魔法使い見習いレベルの私でもはつきりと見えるぐらいの、どす黒い魔力が集まっていた。

そして、ユウトさんの真正面まで来たイノリさんは、拳をギュツと握り、腕を引いた。

「おいおい……そりやねーぜ……」

「よしっ！ 準備万端！ つーわけで……死ねいっ」

イノリさんは満面の笑みで拳を振り下ろした。その拳は見えない。イノリさんの拳が当たる。とてつもない爆発音が中庭中に響き渡る。物凄い量の煙が舞う。

「フィ、フィレーヌ様っ！？ ユウトさんが！」

「心配しないで下さいアナさん。……イノリさんには失礼ですがユウトが負ける筈無いでしょう？」

フィレーヌ様は最期の一言をボソツと呟いた。真横に居た私にははっきりと聞こえていたが。

「えっ？」

煙が晴れていく。イノリさんの姿が見えた。イノリさんはさっきまでの満面の笑みとは違い、不思議そうに首を傾げていた。

「つかしーなあ？ こんなに煙が出るはずないんだけどなあ」

イノリさんがそう呟いた後、晴れてきていた筈の煙が再び、私達の視界を覆いつくした。

「うわっ！？ フィ、フィレーヌ様！？」

「大丈夫です。私はここに居ます」

慌てた私をフィレーヌ様が宥めてくれた。

「あんつのやろおお。ぬか喜びさせやがってえ！」

イノリさんはなにやら叫んでいるようだけど……。何かに気付いたのかな？

「あら、ユウトは魔法を使ったみたいですね……。多分長引くんじゃないでしょうか？ ユウトの勝負は魔法を使い始めてからが本番ですから」

そういうフィレーヌ様の声は呆れたような表情とは異なり、何処か楽しんでそうだった。

「はぁ……」

とにかくこの勝負はまだ始まったばかりらしい……。

第五話 やっと始まったファンタジーの王道（後書き）

やっとバトルが始まりました！

あれ？ ギャグがしたかったなあ……
感想宜しくお願いします！

第六話 デリカシー程大事なものは無い

「さーと、どーこいったのかなあ？ あたしの一番大事で、大切に、愛しくて、格好良いつて思うご主人様はあ？」

イノリさんは笑いながら、それでいてこめかみをぴくぴくさせながら、辺りを見回していた。

さつきからユウトさんの姿が見えない。フィレーヌ様曰く、煙を自分で大量に生成し、それに紛れたらしい。

しかし、あの拳が当たっていたら凄まじい事になっていただろう。なんせイノリさんの目の前に在ったはずの木が切り株を残し、跡形も無く消し去られていたんだから。

「ちっ！ これじゃあ埒があかねえよ。なんかいい方法は無いものか……おおそうだ！」

イノリさんは何か思いついたようだ。すると突然、イノリさんは私達のほうに来た。

「あわわわ……」

「ん？ おお、あんた新入りのラナじゃん！ 見てたの？」

「は、はい……」

「そんなに怯えんなって！ 誰も取って食いやしねえよ！」

いや、あなたが一番しそなんですけど……。そんな事を言えるはずも無く、私はただ愛想笑いを返すしか出来なかった。だけど好

戦的でキツい性格だと思っていたが、その笑顔は思いの外、可愛らしかった。

「如何されたのですか？ イノリさん？」

「ああそうそう、聞いてよフィーちゃん！ アイツの姿が見えねえんだよ！ どうしたらいい！？」

フィ、フィーちゃん！？ もしやと思うけど……

「そうですね。あたり一面吹き飛ばしては？」

やっぱり貴女様でしたかつ！？ フィーちゃん……？ 仲良すぎでしょ……。

「おお、なるほど！ そうだな！ 姿が見えないって事はどっかに隠れてるって事だもんな！ さんきゅっフィーちゃん！」

「どう致しまして」

あ、あたり一面吹き飛ばすって……確かにそれが一番効率的かも知れないけど、なんと物騒な。イノリさんはニコニコしながら、再び元に居た場所に戻っていった。

っていうかイノリさん、魔法も使えないのにどうやって？

「さてと、ではラナさん少しばかり伏せておきましょうか。危険ですので」

そう言ってフィレーヌ様は、私の頭にそっと触れ、地面に這い蹲らせた。

「で、でもイノリさん、魔法使えないんですね？ 一体どうやって？」

「……まあ、今に分かります」

フィレーヌ様がそう言った直後、イノリさんが叫んだ。

「よっしゃあー！！ いくぜえー！！」

イノリさんは拳を高く上げ、地面に向かって振り下ろした。すると中庭に凄まじい爆発音が轟き、あたり一面に爆風が生まれた。

「きゃあああ！！」

その爆風は木々を飲み込んでいき、綺麗だった中庭は一瞬にして半径三十メートルくらいの荒野と化した。まだ芝生のあるところに倒れていた人たちも巻き込まれたのか、吹き飛ばされていた。すると全員いつ来たのか、医療係の人達に担架に乗せられ医務室へと連れて行かれた。

荒野の中央にイノリさんは立っていた。というか拳で辺り一面を失くすとは、なんと恐ろしい。

「みつけた」

そう言って笑ったイノリさんの見つめる先には、ユウトさんが座り込んでいた。

「おまつ、それはねえだろ！」

「フィーちゃんの助言だし？ やらなきゃ損じゃん？」

「あのやるゝ……」

「じゃあ、止めをさそうかな？」

イノリさんの拳には再び、どす黒い魔力が溜まっていた。
私とフィレーヌ様は起き上がり、互いに服に付いた砂埃を掃った。

「そうはいくかよー!!」

「おおっとおっ!!」

ユウトさんはイノリさんの前まで駆けた。そこから肉弾戦が始まる。先ずユウトさんが顔面に右ストレートを繰り出した。イノリさんはそれをいとも簡単に避けると、魔力の溜まった右拳をユウトさんの腹にアッパーとして突き出した。ユウトさんは声にならない声をあげ、そのまま高く飛んでいった。

「ありや、魔力で掻き消されちゃったかあ。まあいいや、……いよつとおっ!!」

イノリさんは呆れた表情で自分の右拳を見つめ、上を見上げながら、飛んでいったユウトさんを追うように、自らも空高く跳んだ。四十メートルは跳んでいるだろうか？ よく見えないがユウトさんが殴られたのか、凄い勢いでユウトさんが落ちてくる。

「ユウトさんっ!!」

ユウトさんは地面に思いつきり叩きつけられた。

「フィレーヌ様！？ ユウトさんがっ！」

「ですから、心配しないで下さい。ほら、よく見てみて下さい。何か変でしょ
う？」

「えっ？ …… あっ!？」

フィレーヌ様はユウトさんが叩きつけられた方向を指差した。するとそこには叩きつけられた筈のユウトさんはおらず、代わりにユウトさんみたいな人形が倒れていた。

「な、何ですか……あれ？」

「あれは私お手製の、その名も『ユウト君人形46号』です。イノリさんとの戦闘の時に良く使うものナンバーワンです」

「よ、よんじゅう……」

戦い過ぎでしょう、ユウトさん……。それにしてもフィレーヌ様は毎回こんなもの作ってるんですか!？」

「変わり身ですか……でもどこから？」

「ポケットですよ。あれは伸縮自在で折りたたみ可能な一点ものですから」

そういうフィレーヌ様の顔は誇らしげだった。

ドスンと鈍い音を立てて地面に着地したのはイノリさんだった。イノリさんは人形を見つめると、またかよ、と呟いて肩を落とした。

「どーこいったんだ？ ……？」

イノリさんが辺りを見回す……事は出来なかった。そこにはイノリさんの首をがちりホールドし、体を絡めた、ユウトさんが居た。

「あつれ〜？ 如何しちゃったのかな〜イノリちゃん？ 体術じやこの館で一番じゃなかったっけか？」

「てんめええええええ……」

私は啞然となった。一体いつの間にユウトさんはイノリさんの横についたのだろうか？ それもイノリさんが首を回そうとするまで気付かなかったなんて……。

「はあなあせえええつー！！」

「はっ！ みすみす離すわけねえだろ！ ここで離したら俺が死ぬわっー！！」

イノリさんがユウトさんの腕の中で暴れる。しかし微動だにしない。……ちょっと羨ましいと思うのは私だけではないはず。

「あっはっは！！ 災いと恐れられたお前も俺には敵わんのだ……よ……？」

急にイノリさんの動きが止まり、ユウトさんが不思議そうにした。

「……………」

「あり？ どしたイノリ？ 諦めたか？」

ああ最低だ……なんとユウトさんはイノリさんが暴れた弾みで……む、胸の辺りに腕を回していた。後ろだから見えていないのかな？ いや、見えて無くても分かるはず……。

あっ……。

ここで私は一つの結論に達する。

「イノリさん……」

「ラナさん思っても言っではいけませんよ？」

私は哀れむ事しか出来なかった。フィレーヌ様はもう何ともいえない顔になっていた。

「おい……。ユウト……」

「あ？ なんだよイノリ？ 降参？」

イノリさんの顔はキャスケットと髪の毛で見えない。けど真っ赤なのは分かる。ただそれが怒りなのか羞恥からなのか……。

「——、当たってる……」

「え？ 何だって？ 何が当たってるって？」

「だから……その——が……」

「あ？ きこえねえよ？」

「だからっ！！ む、胸……に、腕が……」

「ん？ ああごめん。 んで降参かつ？」

そ、それだけですかユウトさんっ！？ よく見て下さいよっ！
あんな凶暴なイノリさんが顔真っ赤にしていますよ！？ って後ろからじゃ見えないか。

それでもそんな衝撃的事実を知ったのにそれだけは無いでしょ
うっ！？

「いや、降参はしないけど……」

「は？ どーしたんだよお前。 じゃあ暴れるよ。 張り合いねえーな
あ」

あゝあ、イノリさんがすっかり女の子になってますよ？ 気付いて
あげて下さいよユウトさん？ っていうかイノリさんも意固地にならずに
降参したらどうですか！？ はたから見れば抱き合ってるようにしか見え
ませんよ！？ しかも荒野のど真ん中で！

ユウトさんにいたってはまだ腕が離れてないし。 ……わざとやって
ます？

「あの、出来れば腕ずらして欲しいんだけど……」

「あ？ 俺が死ぬじゃん。 やだよ」

ユウトさんの馬鹿っ！ フィレーヌ様からの圧迫感が凄いです
よ！？

「にしてもお前の胸触ってたんだ俺。ちょっと柔らかかったから腹かと思ってたけど。お前言うほど無いんだな。あはは」

「サイテー……」

私とフィレー又様の声が重なった。

「お？ どうしたイノリ？ さつさと降参って言っちゃえよ？」

「……ねえご主人様？」

「え？ 何急に？ すっげーこええよ？」

「言わない方がいい事も……在ると思わない？」

イノリさんの目は据わっていた。私とフィレー又様は一足先に館に戻る事にした。後は宜しくお願いします、ユウトさん。

「私の大事で、大切に、愛しくて、格好良いご主人様……」——儚く死ぬ、annihilation」

「ちよっ！？ お前それ禁じ手……っつーか何で使えんの！？……ぐおおおおおおおおおおおお……」

館に戻る前に青く光る流星みたいなのが飛んできて、本日何度目かの爆発が起こったのは、きつと気のせいだろう。それと、空にキラッと光る何かが現れ、それがユウトさんの声を発しながら消えていったのも、気のせいだろう。

あ、イノリさんも館に入ってきた。ものすごく清々しい顔をし

ている……。

そういえば、ユウトさんは何処に行っただろう？

第六話 デリカシー程大事なものは無い（後書き）

一応毎日更新を心がけています。

春休みなんで……

アドバイスや批評があれば宜しくお願いします！

第七話 イノリの苦悩 ラナの苦勞

そこは、ある城の一番奥の部屋。そこで男女六人が神妙な面持ちで話し合っていた。

「……というわけで、奴隷狩りユウトに関しての情報は以上です」

恰幅のいい老人がそう言うと、緋色の髪を真ん中で分けた男が満足げに頷いた

「ご苦勞だったセルバータ。では、早速今から行くでしょう」

「王子？ もう少し援軍を連れて行かなくても宜しいのですか？
いくら少数精鋭だと言っても相手は奴隷狩りですよ？」

紅一点である、赤色の髪を後ろで結んだ女が、心配そうに尋ねた。

「心配するな、レッカ。ここにいる者たちは皆、この国のあらゆる分野のトップだ。そうだろ？ ナギサ？」

ナギサと呼ばれた金髪の青年は王子をチラッと見てからこう答えた。

「そうですね。セルバータ殿は情報収集の第一人者、レッカ殿は魔術でなら国の最高術者、リユーノ殿は体術にて右に出るものはおらず、わたくし、ナギサは武術に関しては、この国の中だけに限りませんが最強であると自負しております。そして、レンガ・ストリウス様はこの国の王子……。国王が病に倒れている今、実質、最高権力者は貴方殿でしょう」

「長い。くどい。うざい。そして俺が入ってない」

ナギサが言い終わると、黒髪の小さなモヒカンをした、筋骨隆々の男が呟いた。

「おや？ アルバラン殿は一体何のトップで在らせられるので御座いましたか？」

「きつさま……」

「もう良い。やめろ。アルバラン、貴様が何のトップでもない事は皆、知っている」

「そりゃ無いですが、王子」

男の言葉に、わっと笑いが起こる。

「全く、王子はユーモアにとんでいらっしゃる」

老人がそう言うと、男が席を立った。

「よし、前議はここまでだ。もう一度作戦を確認する。セルバータはここにて皆に指示を与えよ。ナギサとアルバランは奴隷の回収、リユーノはあの館に居るといわれる、『天禍のイノリ』を倒せ。レツカ、貴様は『理透の口口ナ』だ。そして俺様は奴隷狩りユウトを殺す」

「はっ！」

五人の声が重なる。そこでリユーノと呼ばれた藍色の髪の青年が言葉を発した。

「上手くいきますかねい？」

その問いに王子は口元を吊り上げる。

「上手くいつてもらわないと困るんだよ。なんせ両親を騙し、妹を奴隸として売り払い、体に発信機を埋め込み、わざわざ六年間も待ったんだ。あの小娘は……頭もたいして良くないくせに、奴隸制度はやめてなんてほざきやがった。妹は殺しても構わん。ただ奴隸どもは生け捕りにしろ。以上だ」

そう言った王子は身を翻し、その部屋を後にした。王子がドアを閉めると、そこにいたはずの男女は埃を少し舞い上げ、全員既に居なくなっていた。

王子は誰も居ない廊下を一人歩き、突然立ち止まり、呟いた。

「……くくく、もうすぐ会えるなあ。久しいぞ——ラナ？」

~~~~~

「ラアアナアアア……!!」

「うわっ!?! 何ですかイノリさんっ!?!」

私が夕食を食べ終え、リイシャ達より一足先に部屋に戻ってくると、イノリさんが飛びついてきた。　　っていうかイノリさん今日も私服？　仕事は？

「如何したんですかイノリさん？」

私は飛びついてきたイノリさんを受け止めて……なんていう芸当が出来るはずもないので、ぶっ飛んだ私とイノリさんはベッドに倒れこんだ。……つまり今はイノリさんに押し倒されている状態。……何でこんな気まずいの？

そんな事はお構いなしにとイノリさんは涙を流してくる。さっきからほっぺに涙が当たってくすぐったい。災いとまで恐れられたイノリさんが泣くなんて、ひそかにこの館にあるファンクラブの人達が知ったらどうなるだろう？

「ひつく……えぐ……今日も……今日もユウトに謝れなかったあああ……！」

「またですか……」

例の中庭消失事件から早や五日、イノリさんはずっとこの調子。フィレーヌ様も手に負えないらしい。イノリさんはユウトさんをぶっ飛ばしてしまった事を謝りたいらしい。

「別にイノリさん、悪くないんですから、謝らなくてもいいじゃないですか」

「でも、でも……ひつく、……やっぱり、悪い事したなあって思ってるし……うう……ここ最近、一回もユウトと喋ってねーし……」

「はあ……。フィレーヌ様に相談してはどうです？　きっと役に立つ情報を……」

「そ、それが……流石に如何すればいいのか分かりませんって笑い

ながら言われて……」

それ、確実にからかわれてますよ！……とは言えないので、そうですか……とだけ、言っておいた。

「勇気を出して謝りに行けばいいじゃないですか」

「分かってるよ……でも何故かあたしが謝ろうとすると、必ず他の奴らがユウトをどっかへ連れてくんだよ！」

そ、それもフィレー又様の策略では？……なんてやっぱり言えるはずも無いので、黙っておいた。

「ホントにどうすりゃいんだよ……？」

「イノリさん……」

なんかもう……ホントに哀れになってきた……そうだ！

「イノリさんって何でいつも私服なんです？」

「え？　だって仕事なんかねーし……」

イノリさんはキョトンとしている。あ、可愛い。相変わらずキャスケットは被ったままだけど。

「仕事ないんですか？　警備係ですよ？」

「なんか、あたしは緊急の時だけでいいって言われて……」

「じゃあ館の仕事をしましょうよ！ 廊下の掃除とか！ それで仕事なんかしてる珍しいイノリさんをユウトさんに見せるんです！ そしたら勝手に向こうから喋ってくれますよ！」

「……おおっ！！ 名案だナ！ よし早速明日からやろう！ 手伝ってくれるよな？」

「もちろんです！」

「ありがとうー！！！」

そう言ってイノリさんは私に抱きついてきた。ベッドが軽く弾む。すると部屋のドアが開いた。リイシャ達、戻ってきたんだ。……ま  
ずいっ！

「ただいまー……ってなにしてんの！？」

「あ、あれは『天禍のイノリ』さんです〜！」

リイシャとルツカちゃんが此方を見て叫ぶ。

「……おーまいがっ……」

シフォウちゃん……。

「んあ？」

噂は一瞬で広まりました。どんな噂かはまた後日……。

~~~~~

そんなこんなで翌日。私は館の中庭が一望できる、大きな廊下へと来ている。ここは今みたいな昼頃の時間は皆、休憩の時間なのであまり通らない。これならイノリさんもしやすいだろう。あらかじめ清掃係長から掃除道具一式も借りてきて、ここの掃除担当も代わつてもらったし、これで準備万端！さてと肝心のイノリさんは……。あ、来た来た。……ぶっ！

「おいラナ……今、笑っただろ？」

「いえいえそんな滅相もないっ！ 似合ってますよイノリさん！」

「そ、そうか？ これ着んのも久しぶりだしなあ……動きづれーなやっぱ」

そういうイノリさんは普段の私服姿とは異なり、この館の正装(?)である、メイド服を着ている。

「にしても、キャスケットは外さないんですね？」

「ん？ ああこれ？」

と言ってイノリさんは自分の頭に乗っている帽子を指差した。

「これは、あたしがここに入ってきた時にユウトがくれたモンなんだよ。だから出来ればはずしたくねーんだよなあ」

そう言ったイノリさんの声は弾んでいた。

「ユウトさんのこと好きなんですネ」

「ああ、大好きだ」

はつきりと言ったイノリさんの頬は少し紅くなっていた。

「別に外さなくてもいいですよ？」

「そう？　なら助かる。……じゃあちやっちやと始めるか！」

「はい！」

くくく

そうして掃除し始めて三十分が立った。ここで私が驚かされたのは、イノリさんの手際が以上にいい事だった。鋭い見た目に反して、手先が凄く器用でスピードもあった。三十メートル以上はゆうにあるこの廊下ですら、もう半分が終わってしまった。

「よーしあと半分だな」

「イノリさん凄いですね……」

「ああ、入った時はこんな雑用ばっかだったからな。七年ぶりだから上手くできるかどうか分かんなかったけど、やってみるもんだな！」

「七年ぶり？　イノリさんはここにいつ入ったんですか？」

「あたし？　あたしがここに入ったのは、ユウトが奴隷狩りを始めた日だよ」

「イノリさんも奴隷だったんですか？」

私は当然のことを聞いた。

「ああ、あん時は辛かったなあ」

イノリさんがしみじみと言う。

「その時はイノリさん強くなかったんですか？」

「うん、あたしが『天禍』って呼ばれるようになったのは、ここに入って二年くらいしてからだよ。ユウトに毎日鍛えられてね。あ、そうそう鍛えられたって言えばフィーちゃんもだぜ？」

「フィレー又様も!？」

これは吃驚。まさかフィレー又様もユウトさんに鍛えられていたなんて。

「あたしとフィーちゃんともう一人、こいつは気に食わねえけど、一緒に入ってきた奴がいんだよ。これがまた最悪でさー。『理透』なんて呼ばれていい気になってやがんの。ラナも近寄らない方がいい……ぜ……」

「だーれが、いい気になってるのかな？」

「……おう口口ナ。あんた誰の頭掴んでんだよ？」

イノリさんが力説して、私が少し引いていた頃にその人は現れた。

全く気が付かなかった。この館の人はそういう人が多いね……。

ロロナと呼ばれた女の人は、紫で私とイノリさんの髪の長さの半分くらいのところと言う、何とも中途半端なところまで伸びた髪に、一本だけ頭から髪がはねていた。

第一印象は中途半端な人。来ているメイド服も少し、はだけている。

確かこの人は『理透のロロナ』。この館一の魔法使いで、イノリさんと互角に戦える、数人のうちの一人らしい。『理透』の由来は、魔法において最も高度とされる、『理』を操る事ができ、詳しくは知らないが、『色』に関する魔法を『理』に混ぜる事から、この名前が付いたらしい。

……ってこの人、よく見たらさつき、この廊下の掃除の許可を貰いに行った時に、許可をくれた清掃係長じゃん！ この人がロロナさんだったんだ。

「なーによ、人の噂なんかして。それにしても、聞いたわよ？ ユウトにフラれたから次はその娘を狙ってるんだって？」

はい。これが噂です。最悪です。完璧に広がってました。せめてユウトさんのとこまで辿り着かないで。

「っていうか久しぶりに貴女の掃除見たけど、やっぱり綺麗ね。警備係なのもつたいないくらい。……それにしても、貴女のメイド服姿……あっはっはっはっは！」

「わ、笑うなー！！」

「あっはっはっはっはー！！」

この人達、やっぱり仲がいいんだ。

「あ、私そろそろユウトさん呼んできますね？」

「ああ、頼むラナ！ あたしはそれまでにコイツを殺しておく！！」

「あはは。ラナちゃん？ 貴女もかわいそうね。こんな野蛮人に付き合わされて」

「てんめえ〜！！ ぶつち殺オおおすっ！！！！！！」

イノリさんがそう叫んだとき、突然中庭が光った。

「きゃっ！？」

「うおっ！？ なんだ！？」

慌てて中庭を見ると、そこには人が五人程立っていた。

そしてその真ん中に居る緋色の髪の男の人に私は見覚えがある。

「……………兄さん……………」

第七話 イノリの苦悩 ラナの苦勞（後書き）

毎日更新はなかなかヘビィです……

第八話 侵入者

「なんで……兄さん……？」

あの緋色の髪……鋭い目つき……間違いなく私の兄……。

私の体は震えた。それはまるで私の体にだけ地震が起こっているような、そんな感じだった。

何故あの人がここに……？ 私を奴隷へと仕立て上げた、私が最も憎み、恐れている張本人。そして、私の実の兄である、国の王子レンガ。

怖い、恐い、怖い、怖い。足が竦む。もうダメ。立ってらんない。私は廊下に、崩れ落ちるように座り込んでしまった。

「ラナちゃんっ！？ 大丈夫！？ 今すぐ医務室に……」

そう言っ、私を抱え上げてくれたロロナさんを、私は手で制した。

「だ、大丈夫です……私が眼を背けちゃ……いけないから……」

強がりなんかじゃない。これは私の問題。私自身で乗り越えて、打ち碎かなければいけない過去。そう、ユウトさんなら忘れさせてくれる、忘れなければならぬ過去。今、ここから逃げ出せば、どれだけの開放感が得られるか。だけど逃げちゃダメ。せっかく助かったんだから……。

「ラナ、アンタの兄さんが居るの？」

イノリさんが座り込んだ私の肩を、優しく触れながら聞いてきた。

「……はい」

「どれ？」

私は中庭に居る人達を指差しながら答えた。

「あ、あそこの集団の……真ん中に居る……緋色の髪の男の人……」
もうダメだ。涙まで出てきた。声の震えも抑えられない。

「この様子からすると、味方……じゃねーな？」

私は黙って頷いた……はず。もう体も思うように動かない。でもきつと伝わっただろう。

恐怖って言う感情はここまで人を支配するのか……。人間の中で一番強く、汚く、醜い感情……。

私はこの感情の圧迫に耐えることが出来なくなり、意識を閉じようとした。……いや、強制的に、意識を閉じた。

くくく

「コロナ、ラナを医務室まで運んでくれ！」

「分かったわ！……って貴女は如何すんのよ！？」

「とりあえず……一発ぶち込んでくる！」

イノリがそう言った直後一陣の風が吹いた。すると、既にイノリの姿は見えず、代わりに爆音が鳴り響いた。

イノリは一瞬で中庭に居る集団の中の、緋色の髪の男に拳を突き出していた。しかし男は容易く受け止め、イノリを弾き飛ばした。

「ばか……何やってんのよ……取り敢えずわたしは、ラナちゃんを医務室に連れてかないと……」

ロロナは意識を手放したラナを肩に担ぎ、足早に医務室へと向かった。

「ちっ！」

「くくく、貴様、『天禍のイノリ』だな？　おい、リユーノ」

「あいよっ！」

リユーノと呼ばれた藍色の髪の青年は、集団から一步前へ出て、イノリの前に立ちふさがった。

「ああ？　誰だよアンタ？　ここに無断で入ったからには、それなりの覚悟が出来てんだろっな？」

「覚悟するのはお前の方だぜい？」

そう言ってリユーノは口元を吊り上げた。

「はっ！　冗談も度が過ぎると笑えねえぜ？」

「冗談かどうかは自分の体で試してみなあ、貧乳メイドちゃん」

「ぶつち殺すっ！！！」

イノリがそう叫んだ瞬間、イノリとリユーノの拳が噴火のような爆発音をあげ、交わった。

その傍らで、緋色の髪をした男は、冷静に他の者に作戦を伝えていた。

「よし、作戦決行だ。ナギサとアルバランは奴隷の回収に行け」

「はっ！ ナギサ、こつちだ。来い」

「はい」

アルバランと呼ばれたガタイのいい男は、ナギサと呼ばれた金髪の青年を引き連れ、中庭を駆けていった。

残った緋色の髪の男と、赤色の髪の女は館の方へ向けて、歩き出した。

「レッカ、貴様は『理透の口口ナ』が見つかるまで俺と共に行動しろ」

「畏まりました」

「ここは頼んだぞ、リユーノ」

緋色の髪の男は今も尚、戦闘中のリユーノの方を、チラリとも見ずに声だけをかけた。

「あいよ！ 任せてくださいませ！ 直ぐに追いついてみせませあ！

そんな時は例の報酬忘れねえでくだせえよ!？」

「ああ分かっている」

「ごちゃごちゃ喋ってんじゃねーよ!！」

再び爆発音が鳴り響く。

「行くぞレッカ」

「はっ!」

~~~~~

時間は少し遡り、一度目の爆発音、つまりイノリの一発目の拳が当たる数分前のこと。黒髪の男でこの館の主人であるユウトと灰色の髪を持った美女、フィレーヌは、ユウト自室にて、今月の出費などを計算していた。

「……よしこれで終わりつと……」

「お疲れ様です。では早速、愛の営みを……」

「いや、しねーよ? 何考えてんのお前?」

「全くユウトは昼間から……大胆ですね?」

「いや、俺何もしてねーよ!?!? 誤解を招く発言はやめろ! ……」

ん？」

フィレーヌの暴走を食い止めようとしていたユウトが、何かを感じたように突然手を止め、窓から中庭を見た。

「……侵入者ですね」

「ああ、ってイノリ！？ 何やってんだアイツは！？ うおっ！？」

館中に一発目の爆発音が鳴り響いた。

「きゃっ！？ ……相変わらず物凄い威力ですね、あの拳は」

「んな暢気なこと言ってる場合かつ！ さっさと行くぞ。あの緋色の髪の男、確かラナ達の居たりエルト君主国の王子だ。ここも嗅ぎ付けられたか……フィレーヌ、お前は先ず館の全員を別館に避難させて、警備係に周りを固めさせる！」

「畏まりました。……ユウトは如何するのですか？」

「奴等を倒す」

そう言ったユウトは、中庭に向けて鋭い眼光を放った。

「分かりました。では御健闘を」

「ああ。あ、それと口口ナを見つけたら、俺のところへ来るように言っておけ」

「はい」

フィレーヌとユウトは部屋から出ると別々の方向に向かって走り出した。

「……あのクソ王子……ぶち殺す！」

~~~~~

「誰か居るっ!？」

イノリと別れたロロナは、ラナを担ぎ、医務室までやって来た。医務室には三人の男と二人の女が居た。休憩中だったようで、全員寛いでいた。

「ど、如何したんですかロロナさん？」

一人の若い男の医師が、普段は中途半端だが、しっかりしているロロナが焦っているのを見て、緊張した面持ちで聞いた。

「今すぐこの子連れてここから逃げて！ 緊急事態よっ！」

「と言う事は別館に移動ですか？ さっきの爆発音といい……一体何が……」

「詳しい事はフィレーヌにでも聞いて！ 取り敢えず今は早く移動してっ！」

「わ、分かりました！ おい、お前たち！ 担架を用意しろ！」

「任せたわよ！」

そう言うや否や、ロロナは再び中庭に向かって走り出した。

「確かあれはリエルト君主国の第一王子……ついにユウトもあそこから恨みを買ったのね……」

リエルト君主国は奴隷制度を重んじる、暴虐な王子が居る事で有名な国だった。国王が病で倒れているとの噂が流れ出ている今、権力を持っているのは緋色の髪王子だった。

「ロロナさんっ！」

「え？」

走っていたロロナの直ぐ横に、いつの間にかフィレーヌが並走していた。

「フィレーヌ……アンタって人は毎度毎度……」

「私は今からユウトの命で別館の方に向かうのですが……」

「別館？ 中庭と真逆じゃない！ 何やってんのよ!？」

「その際、ユウトにロロナさんを見つけたら、自分のところへ来るように言われています」

「ユウトのところ!?」

「はい」

「分かった、今何処にいるか分かる？」

「恐らく、中庭に向かつてるかと」

フィレーヌは中庭の方を指差しながら答えた。

「ありがとう、それじゃ！」

「はい、御健闘を」

フィレーヌはそう言うと、更に走る速度を上げた口口ナを横目に、自分も向きを変え、別館の方へ走り出した。

「さてと、放送室に行って別館への避難を促しますか……」

第八話 侵入者（後書き）

今回はちょっと少なめです。

嵐の前の静けさってことですよ。

……多分。

第九話 青と藍（前書き）

いつもいつも読んで下さっている方！

本当にありがとうございます！

なんやかんやで書き始めてから一週間以上が経ちました。

こんな小説をお気に入りに登録してくださっている方もいて、本当に感慨深いです！

不束者ですが、これからもどうか宜しくお願いします！

第九話 青と藍

「おおおおおおおっ！」

「だらあああああああっ！」

緋色の髪の男達が来たときから、爆音が鳴り止まない。それは、青い髪にキヤスケットを被った女のイノリと藍色の髪をした青年、リユーノの拳によるものだった。

緋色の髪の男達が中庭から姿を消し、まだ三分しか経っていないが、交えた拳は既に、千を超えていた。しかし、お互い息を切らす様子もなく、弾き飛ばされあつては、またぶつかり合い、身を削りあつては、再び殴りあうと言ったことが延々と繰り返されていた。

「ったくよお、こんな殴り合いじゃいつまで経ったて、決着なんかつくはずねーな」

「それは俺も同感だぜい？ けどなあ、俺も金が掛かってんだよお！ おいそれと負けらんねえのよなあ！」

「はっ！ こっちだつてユウトに良い報告して、それに乗じて謝ろうって作戦立ててんだよ。簡単には負けられねえんだよな」

「何だあ？ てめえご主人様と喧嘩でもしてんのかあ？」

「喧嘩じえねえけど、喧嘩だっ！」

「分かるぜえそーいうのお」

「おっ？　なかなか気が合っじゃねーか！」

「まあ気が合ってもしやーねえけどなあ！」

「全くだ！」

こんな会話をしている間も、二人は互いを殴り続けていた。もはや打った拳の数は、万を超えていた。一秒経つごとに拳が交わる速度は増して行き、最終的には拳が見えなくなった。どちらも達人の域を完全に超えた体術に、自分も持てる最大の力と技術を加え、互いの目的のために相手に拳を加えた。

「じゃあ、ちよつと速めるぜえ？」

「は？　……うおっ！？」

それまで殴り合っていた二人だったが、リユーノが拳を繰り出す速度を速めた途端、イノリは防戦一方となった。

しきりに拳を繰り出すリユーノ。それを必死に受け流すイノリ。その場から動く事ができなくなっていた。

「このやろ……」

「あっはっはっはっはあ！　如何したあ！？　『天禍のイノリ』とまで称されたテメエが防戦一方とはなあ！」

「ぐっ……」

上下左右、四方八方、ありとあらゆるところから、リユーノはイノリに対し打撃を繰り出した。その速さは止まる事も、衰える事も、弱まる事も、ましてや遅くなる事など有り得なかった。それどころか、打撃の威力は強まり、激しさを増していた。

「!？」

数億は打つただろうか。突然リユーノが膝をついた。肩で息をしている。

「はあ……はあ……何だこれはあ？」

「やーっと効いてきたか、ん？」

「まさかてめえっ……」

「そう、そのまさか！ アンタが出してきた拳全部に、受け流していると見せかけて、筋肉を局部破壊してたんだよね。いやゝなかなか至難の業だったぜ？ アンタに気付かれないよう、大雑把なあたしが細心の注意を払って破壊してたんだからな！」

そう言ったイノリの表情は嬉々としていた。

「これで腕は使えねーだろ？ あたし他にも仕掛けしてさゝ、例えば……これとか……」

「!?!？」

そう言ってイノリはリユーノに対し、己の右腕を見せた。そこにはどす黒いまでの魔力が溜まっていた。そのどす黒さは、イノリ自

らの髪や瞳の色と並ぶ事によって、益々禍々しさを増していた。

「何だあ……その膨大な魔力はあ……『天禍のイノリ』は魔法がつかねえ事で有名だったんじゃないのかよお……」

「まあ確かに使えねえよ？ でも魔力を『操る』と『溜める』はまた別物だ。溜めただけで後、どうこう出来るって訳じゃねえしな。……ただぶつけるだけだ」

その刹那、自らの腕を抱えていたリユーノは、イノリの右拳に腹を殴られ、大きく弧を描き、軽く六十メートルは飛んだ。そして、イノリはすぐさま飛んでいるリユーノを追いかけると、背中から落下しようとしているリユーノに、踵落としを鳩尾に入れた。

落下の速度もあいまって、軽く中庭の芝が捲れるほど、地面に叩きつけられた。

「ぐっ……がはっ……」

「さーて、容赦はしないよ？ よくも、五億八千六百九十二発も打ってくれたな！ あたし借りた借りはちゃんと返す主義だからね！ 今ので二発目だから後、五億八千六百九十発だな！ あ、ついでに、ユウトの為の掃除大作戦まで台無しにされた分も合わせて、後、五億八千七百九十発だ！ おおおおおおおおー！」

「ぐっ……ぐほっ……！ ……その作戦は百発分かよ……！ がっ……！」

「あつたりまえだろ！ 何のために恥ずかしい思いしてまで、メイド服着てると思ってるんだあー！」

「ぐおおおおっ……！」

イノリはとにかくラッシュを続けた。時折、リユーノを天に飛ばし、その際に蹴り等の他の体術も織り交ぜた。

「後、四億六千二十五発……後、三億七発……後、二億五千三百三発……」

着々と拳のラッシュは終了へと向かっている。それと同時に、このカウントダウンはリユーノの意識を高ぶらせるきつかけとなっていた。何故なら、このラッシュが終わった直後、この痛みから解放される。リユーノは既にそういう思考しか出来なくなっていたからだ。自分は筋肉の局部を破壊され、もう既に足腰すらも立たない状態になっている。それでも、辛うじて立っていられるのは、自らの安堵の意識と、イノリの拳が放つ勢いによるものに他ならなかった。

「後、一億七千九十発……後、七千二発……おらっ！」

「ぐはっ!？」

イノリは、既に何度目か分からないが、リユーノの顎を蹴り上げ、リユーノの体を宙に浮かせた。

「さて、そろそろアンタを甚振って弄ぶのも飽きてきたし、ここらで決めるとしようかっ！ ほら、頑張りなっ！ 残り千発だ！」

そう言つてイノリは、空中でリユーノを殴り続けた。リユーノの顔面や体からは血が噴き出している。

「っしゃー！ 最後だ！ 十……！ 九……！ 八……！」

残り十発のところでイノリは拳を止め、なおも空中で、掛け声に合わせ拳を振った。

「七……！ 六……！ 五……！」

既にリユーノに思考と呼べるものは残されていなかった。在るとすれば、殴られていると言う感覚と意識だけであった。しかし、この状況を打開しようと言う考えが出来るわけではなかった。

「四……！ 三……！ 二……！」

イノリがなおも、空中に居続けられているのは、己の拳の勢いによるものだった。

そして、遂に最後の一発となった。

リユーノに残っているのは、ただこの痛みから解放されるという、悦び。

「最後だ…… 漫画風に言うと、歯あ食いしばりな…… かな？ ……
…… っ！……！」

リユーノは最早なす術も無く、ただ拳の勢いと重力に身を任せ、地面へと…… 落ちた。

地響きがし、地面がめり込んだ。

「ふう…… 終わったあ……！？」

「あ…… ああ…… おお……！」

イノリが額を伝う汗を拭い、安堵の溜息を漏らした時、なんとリ

ユーノは再び立ち上がった。立ち上げられる要素など、何処を探しても見つからない。ただしそれは意識が在ればの話。今のリユーノは体術を極めた者だけにある、相手に対する無意識の敬意によって立ち上がっていた。

「アンタ……やっぱすげえよ……」

「ああ……がぁ……」

そう、無意識だからこそ成せる業。そして無意識だからこそ、イノリも敬意を表した。

「あたしも体術の礼儀くらい心得てるから……ちゃんと止めもさすし、いくら敵だとは言えやっぱ称えなきゃな……ありがとう。そして、これで最後だ」

イノリは自らの体内にある残りの魔力を、全て己の右拳に預けた。

「因みにこれは貸しじゃねーぜ？ ……アンタに借りた分の利子だ」

イノリはキャスケットを深く被りなおした。
拳を振るう。

リユーノの体が飛ぶ。そして、二度、三度痙攣をすると、それっきり動かなくなった。

「じゃーな。楽しかったぜ？」

イノリはそう言い放つと、中庭を後にした。

くくく

「ああ、ダメだこりゃ。もう体うごかねえ……」

イノリは戦いの後、医務室へと体を引き摺って行き、ベッドに向かった。

「アイツ、強かったなあ……」

そう、いくら最後は圧勝だったとはいえ、序盤に五億八千六百九十二発もの打撃を喰らっていたのだ。それに相手は自分と同じで体術を極めていた。上手く急所は外したものの、体にガタが来ないはずが無い。

「これじゃユウトの応援に行けねーや……取り敢えず、体がちよつと動くようになるまで休もう。寝るのは……やめた方がいいな。どつから誰が来るかわかんねえし……。頑張れよお……皆」

そう言ってイノリは、この戦いが終わった後、どうやってユウトに謝るか、それを考えながら体をベッドに預けた。

くくく

時間は遡り、イノリがリユーノにラッシュを浴びていた時の事。フィレーヌは各部屋に放送を流し、全員を別館へ避難させ、自分も警備係と同様にその警護に当たっていた。

「フィレーヌ様……」

「はい。どうかしましたか？」

フィレーヌが周りを警戒していると、武装した、大柄な男である警備係長がフィレーヌの元へとやって来た。

「さっきからなっているあの爆発音は一体……？」

「恐らくイノリさんでしょう。先ほど侵入者と対峙していましたから」

「イノリですか……」

「まあイノリさんなら大丈夫でしょう。それより……」

「敵が居たぞー!!」

「!？」

フィレーヌが言葉を発しようとした時、突然一人の警備係が大声を上げた。

フィレーヌが慌てて前を向くと、そこには金髪の青年と、黒髪でモヒカンの男が居た。

「アルバラン殿？ あそこか？」

「おう、間違いない。あそこが緊急時の避難場所になる別館だ」

「よし、ならば早速作戦に移るとしよう」

「おう」

そう言った会話が成されていたとき、フィレーヌの表情は険しいものになっていた。

何故なら昔の仲間であつた筈の男がそこにいたからである。

「お！　そこに居るのはフィレーヌ様じゃないか」

モヒカンの男が親しげに話しかけた。

「これはどういふことですかね？　アルバランさん？」

第九話 青と藍（後書き）

一瞬で終わっちゃいましたね……。
まあバトルはまだまだ続きますが。
感想待ってます！

第十話 紫の行動

イノリがリユーノのラッシュを浴び、フィレーヌが侵入者二人と対峙していた時、時間に見れば、侵入者の存在を確認してから十分程度の時の事、紫の髪をしたメイド服姿のロロナは、未だにユウトを探していた。

「全く……何処よユウトは……」

十分探し続けているのにつからない。それだけ館内が広いということなのだが、気配すら感じられない。そればかりか先ほどから中庭から、イノリとリユーノによる、行き場の失った、術者から零れ出た魔力が館内に入り込み、あらゆる物を壊している事、それに加え、先ほど聴こえた三発の爆発音に、ロロナは少しばかり不安を覚えていた。

「あの爆発音はイノリのものだろうか……あの子が三発も爆発音を鳴らすなんて……ちよつと苦戦してるのかしら……？」

ロロナは今、館の三階にあるホールのようになっている場所の、一番奥の部屋の前に居た。ここにはモニタールームがあるためカメラにうつっているものから、ユウトが探せるだろうと思ったからだ。

「さてと……ん？ 開かない……つてそりやそうよね。……じゃあちよつと悪いけど……」捻じ曲げられても文句なし *twist*」
「！」

ロロナが呪文を唱えると、ドアノブが捻じ曲げられた。それは強引な力によるものではなく、あたかも“最初からそういう存在”だ

ったような風になっていた。

その後、鍵ごと破壊されたドアを、ロロナは蹴り飛ばした。中に入ると壁一面に館の中を映すモニターがあった。

「よし、と……さーて何処にいるのかしら？ ユウトは？」

そう言っただけモニターを食い入るように見回したロロナの眼にある一つの場面が映った。

「イノリ……攻撃を受け続けてる……やっぱり苦戦してるんだわ……何しろリエルトの王子が引き連れてきた奴だし、当然っちゃ当然ね……」

二百六十個のモニターがあるうちの四個が中庭を映しており、そのうちの一つに中庭でラッシュを受け続けているイノリが写っていた。

「援護に行くべきか……いや、イノリならきつと大丈夫……わたしはユウトを探さないと……」

そう言っただけ再びロロナはモニターを見回す。しかし、何処にもユウトの姿は映っていないかった。そして、頭を抱え項垂れた。

「なんで？ 一体何処に行ったのよ？ ……落ち着くのわたし……よく考えて……まず、ユウトなら敵がこのモニタールームに来るかもしれないと思って、何処かに身を隠すはず……ここに映るのは廊下と食堂と中庭、それと館の周りのみ……それぞれの部屋の中と別館までは映らない……となると、ユウトは多分別館に……それはないわね。フィレーヌが別館に居るはずだし……そうすれば、残るは何処かの部屋から皆が見渡せるところに居るはず。……と言う事

は、展望台！　そしてモニタールームに来ないのは皆が避難している別館まで見れないからだわ！」

ロロナは閃いたように言った。そして続けて、呟いた。

「よし、次は敵の位置の確認……」

ロロナは再び顔を上げ、モニターを見回した。

「イノリは未だにラッシュを受けている……周りに敵は見当たらない。私が最初に見たときは五人……。と言う事は、全員バラバラに……いや、あくまでも敵の本拠地、バラバラになる事は無い……あの藍色の髪の男が一人で戦っているのは、恐らくイノリと同じ体術使いね、それも相当腕のいい……。王子からも信頼されているはずならば残りは四人……」

そう言っただけでモニターを見回すロロナは、緋色の髪の男と赤色の髪の女を見つけた。しかし、残り四人敵が居るはずだが、その二人しか映っていないかった。

「居たわね……。あれは王子……。二人で行動か……。となると、残り二人は別館か何処かの部屋か……。あれ？」

そうやって考えているロロナは、モニターに映る王子と女を見てあることに気が付いた。王子と女は二階にある倉庫の前に来ていた。その倉庫はこのモニタールームの真下だった。そして、二人は倉庫のドアを開けた。

「倉庫を開けただけ？　何をする気かしら？　……まさか！？」

ロロナがモニターを見ると、赤い髪の女が手を翳し、なにやら唱えていた。

そして次の瞬間、倉庫は爆発した。上方に爆炎が広がって来て、モニタールームごと巻き込んだ。確実に倉庫とモニタールームだけを狙って爆発させたに違いない。ロロナはそう思った。

二階と三階にホールが貫通した。爆発が収まると、下から声が聞こえてくる。

「これで奴らの連絡手段は途絶えたな」

「はい」

「よし、では再び奴隷狩りユウトを探すでしょう」

そう言って王子と赤い髪の女はもと来た道を戻り、階段へと上っていった。

「……行つたかしら？」

ロロナは瓦礫を掻き分け、辺りを見回した。爆発によって天井を破壊された事でロロナは二階の倉庫の中に落とされていた。そして壊された倉庫に落ちていた、無線機を一つ拾うと、溜息を漏らした。

「ふう……それにしてもやる事がえげつないわね……あゝ無線機全部やられてる……ダメだこりゃ」

ロロナはそう言つと無線機を後ろに放り投げた。

「となると展望台に行くしかないか……あいつらも上に行ったみたいだし、さっきの会話からすると、やっぱり狙いはユウトね……」

そう言ってロロナは服に付いた砂埃を払うと、二人が行った階段とは違う、非常用の別の階段へと走った。

「……………え？」

ロロナはふと思い立って立ち止まった。

「何で奴らは展望台に向かったの…………？」

ロロナは一人で呟いた。

「何でわざわざ展望台に向かったの…………？ 敵をさがす為なら普通、モニタールームに来れば全て見渡せると思うはず…………。しかも丁寧に倉庫まで壊して、あからさまにモニタールームまで巻き込んだ…………。倉庫は偶然見つけられたとしても、来ていないモニタールームまで場所を知っているのはおかしい…………いえ、なにより一番おかしいのは王子の言った事…………『これで奴らの連絡手段は途絶えたな』…………何故…………何故、ここに無線機があることを知ってて、そして、わたし達が普段、無線機を所持していない事を知っていたの？」

自分でそう言ったにも関わらず、ロロナは冷や汗を流していた。

「予想でこんな事をやる意味はない…………もし、予想でわたし達が無線機を所持しているとしたら、倉庫には来ずに、モニタールームだけを破壊するはず…………。モニタールームだけを破壊するなら、どうせ展望台に行くんだから、面倒でも何でも無い…………つまり…………」

ここまで言い、ロロナは考えたくも無い、一つの結論に達した。

「わたし達の中に……裏切り者が居る……？　それも、はいつて間もない人ではなく、ここを熟知している人……もしくは技術係……」

ロロナはそう言うともニタルームのあった場所を見上げた。

「……ダメだ。モニタールームはもう使えない……。イノリがどうなっているかも分からない……。わたしは如何すればいい？　この事実を知っているのは、わたしだけ……。そしてこれは確実……。先ずはファイル又かユウトにこのことを伝えるべきかしら……？」

何故ロロナが曖昧な言い方をしたのか。それは、自らが敬愛し、最も服従すべき相手である、ユウトの命が、それとも恐らくこの戦いの鍵になるであろう事実……。裏切り者の存在を、今唯一所在の知っているファイル又に伝えるべきかで迷った為である。

気にしなければ何の変哲も無い問いで在るが故に、ロロナは自らを追い詰めてしまった。

そして、散々悩みに悩みぬいたロロナの結論は……

「……ユウトを探す。そうだ……。わたしの役目はユウトの元へ行く事。この事実はその時伝えればいい……。イノリのこととは心配だけど、あの子ならきっと大丈夫」

そう言うってロロナは非常階段から展望台へと向かった。

しかし、ロロナはいくつか勘違いをしていた。彼女は、裏切り者の正体が館の中に居ると思っていた。しかし実際は侵入者の中に居たのだ。普段からあまり物事を考えない為、ここで裏目に出してしまった。

そして、ロロナは選択をも間違えていた。もし、ここでファイル又の元へに行けば、裏切り者の正体が分かり、適切な判断も出来ただろう。イノリを助けに行けば、二人で行動する事が可能となり、

さっきの王子と赤い髪の女とも戦えたはずだった。

ロロナは感じていた。あの二人を相手にするには自分一人では無理だと。どちらも一国では最強であろう者を二人……とてもではないが、相打ちにする事も出来ないだろう。なぜならロロナの能力は一对一の時にこそ真価を発揮するものであったからだ。

そのためここではイノリの援護かフィレーヌの元へと行くのがベストであった。

ロロナには知る術も無いが、今、イノリは丁度リユーノのラッシュを防ぎ、反撃しようとするところだった。そう言った意味ではイノリの援護に行く必要も無かったので、フィレーヌのところへ行けば、全てが味方側の方へと有利に進む筈だった。

侵入者の存在を確認してから 17分48秒

くくく

「はあ……はあ……」

ロロナは今展望台の前に来ている。

恐らくここにユウトとさっきの二人がいるだろう——ロロナはそう思った。

そして、このドアを開けた瞬間、攻撃が出来るようにロロナは、自分の右手に魔力を溜め、詠唱も完了させていた。

全ての準備が整い、ロロナは左手でドアを思い切り開けた。

しかし、そこにこの選択が最悪の一手であったことを、裏付ける出来事が起こっていた。

「……え？」

そこにユウトは居なかった。

代わりに、そこには先ほどの二人が居た。

「ん？ おお、貴様は『理透のロロナ』では無いか！」

「……最悪だわ」

考えてみればユウトがここにいるはずが無い。全てを見渡せると言う事は、逆に全てから見られると言う事。そんな状況をユウトが自ら作るはずがない。恐らくユウトは裏切り者が居る事も知っていたのだろう。というか、そうでもないところがある筈が無い――冷静になった頭でロロナは思った。

「……しょーがない。来なさい……わたしが相手になるわ」

ロロナは構えた。そしてここでも一つだけ、されど“戦闘においては”さして影響も出ない誤算があった。

それは、この場所が暴かれたのが裏切り者によるものではなく、先ほど自分が医務室へと運んだラナによるものだと言う事。

そして、ロロナは未だに裏切り者が侵入者の中に居る事は知らない。

しかし、それも今のロロナにとっては最早どうでもいいことだった。

今すべきことは、目の前に居る、この計画の首謀者である、リエルト国王子レンガ・ストリウスを倒す事。

ロロナの眼の光が少しずつ沈んでいく。

侵入者の存在を確認してから 18分30秒

第十話 紫の行動（後書き）

行き成り出てきたコロナちゃんがなかなかのキーマンですね……
感想よろしく願いします！

第十一話 頼みと驚きと紫の過去と（前書き）

昨日、パソコンの調子が悪く、更新できませんでした。
せつかく毎日更新を守っていたのにつ！

……ですから今日の分は昨日の分も合わせちゃえっ！ 何てことを
思ってしまった、いつも以上に支離滅裂な文となっております。
あらかじめご了承ください。

第十一話 頼みと驚きと紫の過去と

これはどういことですか？ アルバランさん？」

灰色の髪を持った女、フィレーヌはモヒカンの男、アルバランにそう聞いた。

「見れば分かるだろう？ ここを襲ってんだよ」

「そうではありません。何故こんな事をしているのですかと聞いているのです」

「うつせーなアンタは。裏切り行為だよ。それでいいか？」

アルバランは頭の後ろを掻きながらそう言った。

「裏切り行為？ 何をふざけた事をぬかしてやがるのですか？ 昔、ユウトに助けてもらった恩を忘れたわけではないでしょう？」

「あ？ 忘れたなあ。悪いけど奴隷の時から人は信じないって決めてたもんでね。それはあのガキだって例外じゃねえ。信じれるのは金だよ！」

「まったく……金に眼が眩んだ愚か者……。確かに貴方はここにいたとき誰とも馴れ合ってませんでしたね？」

フィレーヌは眉間にしわを寄せ、アルバランを睨み付けた。すると突然、アルバランの横に居た、金髪の青年が言葉を発した。

「お話中のところ申し訳ありませんが、僕を無視しないで頂けませんか？」

フィレーヌは青年のほうを向いた。

「これは失礼致しました。私、この館に仕える、フィレーヌという者です。以後、お見知り置きを」

「これはこれは、ご丁寧にありがとうございます。僕はナギサと申します。この度の突然の訪問、此方とて心苦しく思っておりますが、何分、リエルトは君主国なものでして……王子には逆らえないのですよ」

「いえいえ、そんな滅相もございません。しかし、こんな事を言うのもなんですが、少し礼儀がなっていないませんでしたね。もし、ちゃんと正面玄関からいらしていれば、丁重におもてなしをさせていただいたのですが……」

ナギサと名乗った青年は頭を下げながら、こう言った。

「申し訳ございません。これら全て、我が国の王子の……いえ、それを止められなかった僕の責任です。どうかお許し下さい」

「そんな、頭をお上げ下さい。飛び入りとはいえお客様ですから、しっかりとおもてなしさせて頂きますよ」

「本当ですか！？ いや、申し訳ない。そう言っで頂けると此方も安心です。どうでしょう？ 少し話し合いをしませんか？」

「ええ、一向に構いません。私共も穩便に済ませたいものですから」

ナギサの提案をフィレーヌは快く受け入れた。

「では、そうですね。あちらに応接室がありますから、どうぞそちらで」

「分かりました。では行きましょう」

「……じゃねーよ、ポケット!!」

フィレーヌとナギサが応接室に行こうとするのを、アルバランが止めた。

「何ですか？ アルバラン殿？ 話し合いの席を設けてくださっているのだぞ？ 早く行こう」

「早く行こうじゃねーよ、バーカ!! 敵だぞ敵!? 目的は奴隷の回収だろうが!? この偽善者がっ!」

「お言葉ですがアルバランさん、偽善者とは『人』の『為』の『善者』でございます。ナギサさんは、何一つ間違っておりません」

「……屁理屈じゃねーか。そっぴやあのガキもそんなこと言ってたなあ……。っていうか人の為だあ？ 何処に人がいんだよ!？」

「何処とは失敬な。この別館の中に居るでは御座いませんか」

「……ああ奴隷のことか？ あんな奴ら人じゃねーだろ! 奴隷は物なんだよ! 人にはなれねーんだよ! 俺がここから社会に出てどんな生活を送ってきたか、お前は知ってるか!? 奴隷出身だっ

てバレただけで、世間からは除け者！ 家も取られ、食べるものもねえ！ 奴隷生活と何らかわんねえ！ 俺は俺を助けてまでぬか喜びさせたデメエらが憎い！ これは言わば復讐なんだよ！！」

「……そうだったのですか。此方に連絡してくればいいものの、何故？」

「連絡したからどうなんだよ！？ ここに戻ってきたって、何もかわりやしねーじゃねーか！ あのガキばかりモテやがって！ ぶざけんな！」

「「……………は？」」

アルバランの叫びに二人の声が重なった。

「は？ とはなんだ！？ ここの奴らはあのガキばかりで俺のことなんか見向きもしねーだろ！ 畜生ッ！」

「……アルバラン殿、そんな理由で僕達に手を貸してくれたんですか？」

「ああ、そうだよ！ なんか文句あつか！？」

「……………いえ」

ナギサは諦めた様に項垂れた。

そして、フィレーヌがアルバランに言った

「……確かに辛い理由です。……………しかし、貴方の言葉に一つだけ許せない箇所がありました」

「なんだよ？」

「いくら過去がどうあろうと、人は人です」

そう言つとフィレーヌの姿は消えた。

次の瞬間にはアルバランの後ろへ回りこんでおり、背中に手を当てた。

「人は人なんです。その何者意外でもありません」

「くっ……！」

「アルバラン殿！？」

ナギサが助けようと手を伸ばした時にはもう遅かった。

『墜ちた後の成れの果て、朽ちて行くのもその定め、律する事が出来ないのなら己に問え——*annihilation*』

フィレーヌがそれを言い終わると、アルバランの体は闇に一瞬で吞まれ、そして闇は一瞬で引いていった。倒れたアルバランの顔に生気は宿っていなかった。

「こ、これは……この世にある最悪最凶の禁呪……。なぜ……？」

「……この魔法の開発者はユウトなんです」

そう言つたフィレーヌの顔はナギサのほうを向いていなかった。

「なっ！？」

「この禁呪が使えるのは、私とイノリさんとロロナさん、そしてユウト……。一人一人効果が違ってきますが、主な作用は同じです。それは、相手を残滅し殲滅する事」

「……」

「では、申し訳ありませんが、貴方も……！？」

フィレーヌがナギサのほうを向くと、ナギサはなんと地面にひれ伏していた。

「お願いがあります」

驚いているフィレーヌなどお構いなしに、ナギサは続けた。

「な、何でしょう？」

フィレーヌがそう聞き返すと、ナギサは顔を上げ、こう言った。

「妹を探させてください」

侵入者の存在を確認してから 17分50秒

くくく

紫色の髪を靡かせ王子の前に立ちふさがるロロナは今昔の事をはっと思いついていた。

ロロナ……本名、ロロナ・アリシアは二歳から十歳まで奴隷として過ごしてきた。

五歳の頃にある国の貴族の下へと売り出された彼女は、自分の家族など知る術も無く、記憶の断片にあるのは、母親と思わしき女性が自分の手を引き、馬車に乗り込むところだけだった。その後のことは、彼女が五歳になるまで覚えていない。

そこから三年間、毎日床を這い蹲り、馬小屋で寝かされる生活を送っていた。

そしてある日、もう用無しと判断されたロロナは、唯一自慢できる紫色の髪の毛によって、高値で奴隷売買店へと売られた。

ここまではどんな奴隷でも経験はしたことがあるため、こんな話をしても同情はされない。ただ、彼女には他の奴隷とは違う箇所が一つだけあった。

それは、自分が奴隷として、三年間過ごした貴族の家の主が、自分の父親だった事だった。

ロロナが産まれる前、ロロナの母親、ミロナ・アリシアは農村に住んでいて、毎月の食べるものには苦しまないほどに生活が出来ていた。ロロナの母は村でも一番の美女であり、美しく伸びた紫色の髪の毛が街でも評判となっていた。

そしてある日、街で最も有名であった貴族である男がミロナに求婚を申し込んできた。その男こそがロロナの父親であった。

仲間想いであったミロナは、この男と結婚すれば、村の皆へ援助ができ、今よりもっと快適な暮らしが出来る筈だと、そう思い男の求婚を受け入れた。

そしてそれから一年、ミロナに子どもが出来た。ミロナはその子をロロナと名づけた。

しかし、ロロナの父親は、ミロナ子どもが出来た事を知った直後、掌を返すようにミロナとロロナを屋敷の外へと放り出した。

そして、ミロナは街の人達に助けを求めたが、誰も相手にはしてくれず、村へ帰ることを余儀なくされた。その際、村までの馬車を

出してもらおうと、馬車を扱う店の人に頼んだのだが、それが二人の人生を大きく変えることとなった。

美しい紫色の髪を持つ一方で、ボロボロの服を着ている二人を見たとき、店の主人は、馬車を出して金を貰うより、この二人を売ったほうが断然儲かる、と思うってしまった。

こうして馬車に乗り込んだ二人は店の主人に騙され、奴隷売買店へと連れて行かれ、超高額で売られたのであった。その時ロロナは既に二歳であった。

ミロナのほうが先に売られ、一人ぼっちとなったロロナはその三年後、五歳の時に自らの父親に奴隷として買われたのであった。そして、再び奴隷売買店へと売られたロロナは、その二年後、後ろに明らかに奴隷であったであろう、ボロボロの服を着た二人の美少女を連れた、ユウトに助けられた。このときロロナは初めての“人”と呼べる者との会話をし、このときがユウトの初めての奴隷狩りであった。

それからユウトに仕えるメイドとして、七年間この館で過ごしてきたロロナは自分の能力について知りたくようになった。

イノリ、フィレーヌと共にここに入った、その直後フィレーヌは自らの能力を開花させ、その二年後イノリは体術を極めた。

ロロナは一人取り残された。魔術も体術も武術も、平均値よりほんの少しばかりだけ上であったロロナは自らに限界を感じていた。そんな時、自分を奴隷として扱った父親が事故により亡くなったというニュースを耳にした。

その時、ロロナは涙を流した。

最も憎み、恨み、怨み、妬むべき相手であった自分の父親の死去に、何故自分が泣くのかロロナ自身にも理解が出来なかった。

ただその時にユウトはロロナに言った。

「それがお前の長所なんじゃねーの？ 敵も味方も関係なく愛せるってことだろ？ それは良いことだと、俺は思うぜ？」

そう言ったユウトにロロナは言い返した。

「でも……わたしはこの人のこと大っ嫌いよ？ 今、泣いてなんかいるけど、内心は凄く嬉しいのよ？」

ロロナの発言にユウトは首をかしげた。

「なんじゃそりゃ？ ……じゃあさ、それって嬉し涙なんじゃね？」

「嬉し涙！？」

そう言われ、ロロナは罪の意識を感じた。

いくら自分が最も憎むべき存在だとしても、人が死んで嬉し涙を流すなんて……。

「違う？」

「……違うと思う。」

「じゃあやっぱり相手を思ってたんだよ」

「そうなのかしら……？」

「ああ……それがお前の良い所だ。無意識に人のことを思いやれる……そんな良い事はねえよ。お前だけにしか出来ない事だ」

「ユウトは？」

「俺？ 俺はダメだ。例えばお前達の中の誰かが殺されたでしょう。」

そしたら俺は自分を押さえらんなくなる」

「そんなのわたしも一緒よ……」

「そりゃそーだ。自分の大切な人を傷つけられて怒らない奴が居るわけない。でもお前はきつとそうやって傷つけられた相手にでも、戦う時になったら、少し引つかかるものが出てくると思う。……お前は優しすぎんだよ。長所でもあって短所でもある……」

「じゃあ、如何すればいいのよ？」

ロロナは少し苛立ったように言った。

「全部を守ればいいんだよ」

「え？」

ユウトはロロナの眼を見て、真剣な顔で言った。

「傷つけられる前に、相手を追い払えば良い。そしたら相手は敵じやなく、ただ自分と拳を交わした戦友だし、仲間も傷つかない。俺は仲間が傷つけられるような事をしようとしてる奴が敵だと思ってるしな」

「……戦友」

「そ、戦友」

「で、でもその時点で戦っちゃってるじゃない。それだけでわたしは悲しくなるって言ったのはユウトでしょ？」

「だから、戦わなければいいんだよ」

「は？」

「戦わずに相手を追い払えばいい」

「どうやって？」

「そんな能力を身に付けばいいんじゃない？」

そうしてロロナは自分だけの能力を身に付けるため、ひたすら魔法の特訓をした。するといつしか、ロロナは魔法を極め、『理透のロロナ』とまで言われるようになった。

しかし、魔法の超上級である『理』が使えても、相手を傷つけずに追い払う方法をロロナは見つけることは未だに出来ていない。

だから、ロロナはユウトの反対を振り切つてある事をした。それは、自分の長所、短所を魔法により封印する事。こうしてロロナは敵には一切の思いやりを持たない、冷酷な魔法使いとなった。

ロロナが他人から見て中途半端に見えるのはこれが原因なのかもしれない。

くくく

「？ 貴様やる気はあるのかっ!？」

赤色の髪の子が苛立ったように言った。

「え、ああ……あんだ達ユウトを狙ってるみたいだけど……悪いけ

ど、この命に代えてもユウトには指一本触れさせないし、声をかけることさえさせないからね？」

ロロナははつとなり、頭を切り替え、今二人の敵を前に如何するべきか考えた。

「ふっ…… 奴隷狩りも情けないものだ。女性に庇われるとはな」

「ユウトを嘗めない方がいいわよ？ どーせあなた達も瞬殺されて終わりだから」

「では、そのユウトは何処にいるのだ？ 俺様たちを瞬殺出来るのなら隠れる必要も無いと思うがな？」

「さあ？ なんてだろう…… ねっ！」

そう言つてロロナは右手の掌から水球を打ち出した。しかし、王子はそれを体を少し斜めにして、難なくかわした。

「ふん…… その程度で俺様に勝てるんでも？」

「そんな訳ないでしょう？ 小手調べよ」

強がつたロロナではあったが、内心ではユウトの心配をしていた。はつきり言つてこの二人なんかより格段に強いはずのユウトが何故出てこないのか。何か理由があるはず。

しかしロロナにはその理由が思いつかないのであった。

「だといいがな……」

「なぐに、調子乗っちゃってんの？」

「後は、頼んだぞレッカ」

「はっ！」

「え？ 一人？」

「当たり前だ。貴様如きわたし一人で十分！ 王子の手を煩わせるまでもないわっ！」

そう言っているレッカと呼ばれた女を横目に、王子は口口ナの横を通り過ぎ、ドアを開け展望台から出て行った。

「さあ行くぞっ！！」

「……楽勝じゃん」

相手が一人になり、自分の能力をフルに活用できるようになり口口ナは、余裕の笑みを浮かべた。しかし、何故さつき昔の事を思い出したのか、それは走馬灯であるかもしれないことを今の口口ナには知る術もなかった。

侵入者の存在を確認してから 18分53秒

第十一話 頼みと驚きと紫の過去と（後書き）

さてさて、まさかのコロナちゃんが走馬灯を見たっ！？

キーマンだったのでは！？ 死んじゃうのっ！？

とか思っていただけでは幸いです。

次話にご期待……しないほうがいいかな？

第十二話 近寄る時間（前書き）

お久しぶりです。

東日本大震災で被災された皆様。もう地震発生から一ヶ月以上がたち、苦しい生活を送っている事かと思えます。

簡単に言えるようなことではありませんが、私には頑張れという言葉を送るしか出来ません。そしてこんな自分の無力さに、情けなく思っております。

私が出来る事は募金等しかありませんが、心の底から一日も早い復興を祈っております。

第十二話 近寄る時間

「よし……もういいかな……？ ……いつてえー！！ あうう…
…肩、腰、その他もろもろに激痛があゝ」

リユーノとの戦いを終え、満身創痕の体を医務室で休めていたイ
ノリは、涙目になりながらそう叫んだ。

「だーめだこりゃ、動けるようになるまで後どんぐらいかかんだろ
？」

そう言つてイノリは壁に掛けられていた時計を見上げた。時計の
針は二時三十八分を差していた。

「二時三十八分？ えーっと敵が来たのが二時十分くらいで、あた
しがここに来たのが二時三十分くらいだったから……ってまだ八分
しか立つてねーの！？ あたしどうやってユウトに謝るかで一生分
考えたような気がするけど！？」

イノリは驚愕した。自分では既に三十分程ここに居たと思ってい
たのが、まだたったの八分。二桁にも届いていない。それは、辛い
時や苦しい時に時間が長く感じるのと同じ事だった。

「はあ……暇すぎる……こんなことしてる間にも皆戦つてんだろー
な……それはそうとラナはどーしたんだろ？ ちゃんと避難できた
のかな？」

イノリはここから見えはしないのに、別館の方へ顔を向けた。
その時だった、医務室のドアが勢いよく開いた。

「えっ!？」

「ん？ おお、イノリか。だいぶ傷だらけじゃねーか」

「え？ ゆ、ユウト？」

そこに居たのは自分の頭を今、一番悩ませている、この館の主人ユウトだった。

ユウトはイノリの寝ているベッドへ近付いていった。

「な、なんでここに？」

侵入者の存在を確認してから 28分40秒

~~~~~

一方、イノリが医務室のベッドで体を休めていた時、別館では大勢の館の住人が集まっており、その中に銀髪の少女ラナが、医療係に付き添われ、眼を開けようとしていた。

「……ん、うん？ はっ！ ここは!？」

「あ、気付きましたか？」

「えっ？ あっ！ ファイレー又様!？」

体を起こしたラナの隣にはファイレー又が居た。

「大丈夫ですか？ 医療係の話ですとコロナさんが血相を抱えて運

んで来たと……」

そこまで聞いたラナははっとなり思い出した。

「そ、そうだ！ イノリさんとロロナさんは！？」

「イノリさんは恐らく戦いが終わったのでしょう。さっきまで鳴っていた爆音が今はもうありません。ロロナさんはユウトと合流していると思いますが……」

「そうですか……ん？ あ、あの、あの方は？」

そう言っただけでラナは金髪の青年を見た。ラナはこの青年を少なくとも館内では見ていない。

青年はずっと別館の入り口に立っているままだった。

「ああ彼ですか。彼はリエルト君主国軍参謀のナギサさんです」

「リエルトの参謀！？」

ラナの顔面は蒼白になっていた。それもそのはず、何せこちら側が敵と認識している相手が、今味方たちが避難している別館の入り口に悠然と立っているのだから。

「なんでそんな人が……？」

「それはまた後で説明しますので、動揺せずに今しばらくお待ち下さい」

そう言ったフィレーヌの眼には一切の疑心の光は無かった。それ

どころか、僅かな敬意すらも感じられる。一体何があったのかはラナには知る術も無い。

ラナの頭が混乱していると、フィレーヌはナギサと呼ばれた青年を此方へ呼んだ。

「ではナギサさん、此方にいらしてください」

「ありがとうフィレーヌ殿。本当に恩に着る」

「いえいえ、それよりも早く……」

「すまない……」

そう言った参謀、ナギサの顔は安堵と不安の表情が入り乱れ、消え入りそうなものとなっていた。

ラナは思った。一体何故、敵であるはずの金髪の青年はこの中に居るのだろうか。ラナにとっては訳の分からない事ばかりであった。程なくして、金髪の青年のもとに金髪の女の子が近寄った。

「兄さん？」

間延びしているにも関わらず、しっかりと自分の意思を表しているその声の主は、ラナと同じ、元奴隷。

そして、その娘を見つけるなり金髪の青年、ナギサは歓喜の声を上げた。

「ルツカ!!」

「え？ ルツカちゃん？」

侵入者の存在を確認してから 30分26秒

~~~~~

「はあっ!!」

「甘いっ!!」

イノリが医務室でユウトと合流した十分ほど前、ロロナ・アリシアは赤髪の女、レッカと相対していた。

互いに得意な魔術でまさに一進一退の攻防を繰り返していた。しかし得意と言っても、両者とも自らが持つ固有の能力をまだ使っていないかった。

赤髪の女、レッカは小手調べと言う事もあるだろうが、ロロナは幾度と無く自分だけが持つ『理』の能力を発動させようとしていた。いくらでもチャンスはあったはず、それなのにロロナが能力を発動させないのには理由があった。

（——隙がありすぎでしょっ!）

そう、今相対しているレッカに隙がありすぎるのだ。リエルトの王子に一戦を任せられている兵士であるはずなのに、あまりにも隙がありすぎる。

その事が逆にロロナの能力発動を妨げていた。何故なら、レッカの様子はまるで自ら隙を作っているかのようだったからだ。

「くらえっ! 『万物を誘う焼け野の業火——raging flames』!!」

レッカがそう唱えると、ロロナの足元が赤く光り、そして地面が

溶け出し、凄まじい火柱が無数に飛び出してきた。

「当たるわけないでしょ」

しかしロロナは自分の体を右に半歩ずらし、体を傾けただけで、その火柱全てを避けた。まるで何処に火柱が来るのか最初から分かっていたかのように。

「この魔法って威力の割には発動までが遅いし、詠唱も独特だから簡単に見破られちゃうのよね……」

「くっ！」

レッカは歯を食いしばりロロナを睨んだ。

「それよりも……」

ロロナは一旦間を取り、レッカに話しかけた。

「どういうことなの？ さっきから隙ばかり作って……ホントにリエルトの魔法使いなの？」

ロロナは遂にこの戦いが始まってからの疑問をレッカにぶつけた。リエルト君主国はこの世界でも有数の貿易国であり、優秀な兵が揃っている軍事国でもあった。

それなのに、その国から兵として送られてきた魔法使いにしてはあまりに隙が多すぎる。

「答えなさいよ……ワザとなの？」

「……」

「あっそ、答える気が無いならもういいわ。わたしはアナタのその隙が偽物だと思って戦うから」

ロロナがそう言うと、レッカは口をほんの少し開いた。

「……私の尊敬する魔法使いが言った言葉に『偽者は人の為の者だ』という言葉がある。名前は……忘れたが」

「？ だから何よ？ 屁理屈じゃない」

「わからないのならいい。行くぞっ！」

レッカはそう言うとロロナに向けて走り出した。ロロナはすぐさま臨戦態勢に入った。

「はあっ！」

レッカは腰にさしていた剣を左手で抜き、ロロナに振り下ろした。その時レッカの右半身はまたもや大きな隙ができていた。それを見逃さなかったロロナは剣を右腕に纏った魔力で防ぐと、左手に魔力を集中させレッカの体を横から殴った。

咄嗟に腕で庇ったレッカであったが大きく吹っ飛ばされ、あわや屋上から落ちそうになった。

「なによ、肉弾戦も出来ないんじゃない。もういいわ、その隙はワザとじゃないみたいだし、わたしの能力使っちゃうから」

「ぐっ！」

ロロナの癖でもある「中途半端」。これのお陰でロロナの信念は直ぐに変わる。それが災いしてか、ロロナはよく選択を誤る。

「行くわよ？」

ロロナはそう言うと、左手の人差し指に魔力を蓄え、レッカの方へ向けて、空中に魔方陣を描き始めた。

そしてロロナは魔法の中で最も高度な呪文である『理』の詠唱を始めた。

『真理と才に溺れ、倫理と災に塗れ、条理と最を極め、道理と罪を犯した者——』

ロロナが詠唱しながら魔方陣を描いているのをレッカが見逃すはずも無く、すぐさまレッカはロロナに向かって行った。

しかしロロナは構わず詠唱を続ける。

『黒に身を染め、殲滅を理不尽と申すなら——』

レッカの剣がロロナに届きそうになった瞬間、出来上がった魔方陣は大きく膨らみ、レッカの突き出した剣を飲み込んだ。

「！？ なっ……！ なんて……！？」

直ぐに剣を引き抜いたが、引き抜いたその剣は刃が捻じ曲がっていた。まるで万力に掛けられたかのように、折れる事も、欠ける事も無かった。ただ捻じ曲がっているだけであった。

『その身に潜めた黒は、主の為に——理』

ロロナが詠唱を終えた瞬間、膨らんだ魔方陣が更に大きくなった。そしてそのままレツカごと飲み込み、完全に二人だけの世界が出来上がった。

周りの景色も見えない。中に景色は無い。音すらも聞こえてこない。何も無い。ただ、一つだけ、

——無。

そこはこの世で一番初めの世界。道理なんか無い。倫理も無い。そこにあるのは無。無であるがゆえに無が存在するパラドックス。

「これが『理』……」

レツカは感嘆の声を漏らす。自分の全く知らない魔法であるにも関わらず、その声に恐怖や不安の色は見えない。ただ、称えるだけ。

「ふふふ……この世界では全てわたしの思いのまま……アナタが此処から出られるかどうかもわたしの気分次第……」

「……」

「どう？ 『理』の世界は？ 周りは何色かも分からないでしょ？ 此処が何処まであるのかも分からないでしょ？ 降参でもする？」

ロロナは不敵に微笑み、降参をレツカに促した。

「……『偽者は人の為の者だ』」

「？ またそれ？ 一体なんだって言うのよ？」

「隙が偽者？ 言っただろう？ 貴様の為だと。『理』の世界……
これを待っていた！」

「！？」

レツカはこの戦いでもうにも多くの隙を見せていた。

ロロナの癖は中途半端。ロロナの信念は直ぐに変わる。

封印のせいでもあるが、それが災いしてか、ロロナはよく選択を誤る。癖と言うものはなかなか抜けない。それが命のかかった戦いであろうと――。

侵入者の存在を確認してから 20分28秒

第十二話 近寄る時間（後書き）

いやゝ支離滅裂ですね。

っていうか休んでる間にお気に入りに登録してくれた人が居ますが、もう感激です！

本当にありがとうございます！

休んでいる間にも見ていただけているなんて、感無量です！

これからも頑張るのでよろしくお願いします！

にしても少しづつバラバラだったユウトたちの時間が近付いてきましたねゝ

そういうわけで今回はこのタイトルです。

御詫び

皆様、お久しぶりです。

いつも、アボリシオネストを読んで頂き、本当にありがとうございます。

さて、本題ですが、以前、活動報告でも書きましたように、少し期間を開け、ストックを溜めていこうと思っていたのですが、なかなかネタが浮かばず、悶々としております。さらに一ヶ月以上期間はあけないと公言していたのにも関わらず、もう既に長い日にちが開いてしまっています。本当に申し訳ありません。

更に、読み返していくうちに矛盾点なども見つかри、どうしようもない作品となっていることに気付きました。

そこで、一度、全話書き直したいと思っています。

大まかな物語の内容は変わりませんが、キャラの台詞、描写、その他もろもろが少なからず変わっており、一話一話が長くなっています。

まだまだ、書き終わっておりませんが、当初から予定していた数章の内、第一章を書き終えたところで改めて、新しい作品として、投稿させて頂きたいと思っています。

本当に、自分勝手なことをしていていると思っています。

此方の作品は、完結扱いとして此処で一旦終わらせて頂きます。

非常にキリが悪く、自分でも情けない事は重々、承知しております。

因みに、今のところ他のタイトル案がでていませんでアボリシオネストそのままか、もしくは英語表記になるかもしれせん。もしタイトルが変わっても、キーワードにこの作品のタイトルを入れようと思っていますので、見つけられたときには、「ああ、まだや

つてたんだなあ」ぐらいに思っして下さい。……できれば読んで頂きたいです。サービスシーンも少し増やそうかな？ とか考えていますので。

此処まで読んで頂き、本当に感謝しております。新しい作品がいつになるかは分かりませんが、その時はどうか、宜しくお願い致します。

それでは、またいつかお会いしましょう！

2011年6月5日 妙竹林

お久しぶりです

こんにちは、妙竹林です。

皆様、お久しぶりです。

とりあえずご報告を一つだけさせていただきます。

「アボリシオネスト」を改訂したものを9月6日以降に発表します。

その場合のタイトルは未だ考え付いておりません。

ですので、発表前日にもう一度だけご報告させて頂きたいと思っております。

正直なところ、自分では今作よりも出来が良いと思っております。皆様がどう思われるかは分かりませんが、是非一度読んでみて下さい。

それでは9月5日以降にもう一度だけご報告させていただきます。

こんにちは

さて、妙竹林でございます。

それでは予定通り、明日、改訂版アボリシオネストを更新いたします。

タイトルはそのまんまです。ただ、区別をつけるため後ろに英語表記をさせていただきます。

それにしても、この小説をお気に入り登録してもらったり、更新していないときも読んでくださる方がおられたりと、物凄い嬉しいです。

では、明日からまた更新していきたいと思います。よろしく願います。

……毎日更新は恐らく無理でしょうけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8430r/>

アボリシオネスト

2011年10月6日22時54分発行